

M-GTA 研究会 News Letter No.74

編集・発行: M-GTA 研究会事務局(立教大学社会学部木下研究室)

メーリングリストのアドレス: grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ: <http://m-gta.jp/>

世 話 人 : 浅野正嗣、阿部正子、小倉啓子、木下康仁、倉田貞美、小嶋章吾、坂本智代枝、
佐川佳南枝、竹下浩、田村朋子、丹野ひろみ、塚原節子、都丸けい子、根本愛子、
林葉子、宮崎貴久子、三輪久美子、山崎浩司(五十音順)

<目次>

◇第69回定例研究会報告	1
【第1報告】(中間発表)	2
【第2報告】(中間発表)	16
【第3報告】(中間発表)	27
【第4報告】(構想発表)	39
◇近況報告	46
◇第70回定例研究会のお知らせ	50
◇編集後記	50

◇第69回定例研究会の報告

【日時】2014年11月8日(土)13:00~18:00

【場所】立教大学(池袋キャンパス)10号館 304教室

【出席者】77名

青木 利江子(旭市健康管理課)・阿曾 亮子(日本医科大学)・荒川 雅子(東京学芸大学)・飯島
律子(放送大学院)・石川 卓弥(青山学院大学)・石原 佳弥子(一橋大学)・伊藤 由美子(南山
大学)・岩崎 美香(明治大学)・氏原 恵子(聖隷クリストファー大学)・江尻 晴美(中部大学)・大石
ゆかり(埼玉県立精神医療センター)・大串 保美(目白大学)・大澤 千恵子(埼玉大学)・大高 靖
史(日本医科大学)・大野 詠子(広島国際大学)・岡部 倫子(青山学院大学)・小倉 啓子(ヤマザ
キ学園大学)・霍 沁宇(一橋大学)・梶原 はづき(立教大学)・加藤 浩平(東京学芸大学)・加藤
貴子(穂の香看護専門学校)・嘉陽田 友香(沖縄県立看護大学)・川田 彩加(立教大学)・川添
敏弘・河原 克俊(イムス板橋リハビリテーション病院)・菊地 真実(早稲田大学)・北村 愛(一橋大

学)・橘田 康世(東洋大学)・木下 康仁(立教大学)・國本 可南子(東京学芸大学)・久場 加寿美(沖縄県立看護大学)・倉田 貞美(浜松医科大学)・小嶋 章吾(国際医療福祉大学)・小林 茂則(聖学院大学)・小山 道子(上武大学)・近藤 孝司(上越教育大学)・佐野 一規(兵庫教育大学)・坂上 正旭(千葉愛友会記念病院)・櫻井 尚子(東京慈恵会医科大学)・笹山 幸子(京都大学)・庄子 諒(立教大学)・白柳 聡美(浜松医科大学)・鈴木 祐子(国際医療福祉大学)・清野 弘子(福島県立医科大学)・滝澤 寛子(京都大学)・瀧本 光(立教大学)・竹下 浩(職業大学)・立花 和大(立教大学)・玉城 清子(沖縄県立看護大学)・田村 朋子(立教大学)・丹野 ひろみ(桜美林大学)・千葉 洋平(国士舘大学)・殿原 慶三(桜美林大学)・都丸 けい子(聖徳大学)・鳥居 千恵(聖隷クリストファー大学)・長沢 紗希(立教大学)・中原 登世子(早稲田大学)・西平 朋子(沖縄県立看護大学)・西巻 悦子(筑波大学)・沼上 朋恵(上越教育大学)・根本 愛子(国際基督教大学)・橋本 章子(帝京大学)・早崎 広司(桜美林大学)・林 葉子(お茶の水女子大学)・原田 瞳(帝京平成大学)・藤本 りえ(立教大学)・前原 和明(障害者職業総合センター)・眞砂 照美(広島国際大学)・眞鳥 理美(青山学院大学)・水尾 智佐子・宮本 哲也(東京学芸大学)・三輪 久美子(日本女子大学)・山崎 浩司(信州大学)・山田 牧子(共済学園日本保健医療大学)・山本 咲乃(東京学芸大学)・横山 豊治(新潟医療福祉大学)・吉村 春美(東京大学)

【第1報告】

佐野 和規(兵庫教育大学連合大学院博士課程)

Kazunori SANO : Doctor Program, Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education

自傷行為をする生徒に学校教員はどう関わればよいか

How do teachers treat students who injure themselves?

1 問題意識

(1) 自傷行為について

近年、学校現場に自傷行為を行う生徒が一定程度おり、学校メンタルヘルス上の問題の1つになっている(松本 2009)。アメリカでは、学校にメンタルヘルスの専門家が常勤しており、スクールワイドなプログラムを実施する等して、自傷行為等のメンタルヘルス上の対応をしており、一般教員は教科指導に専念するという分業が確立している(高原 2006)。

一方、日本では、非常勤のスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの助言や協力を得ながら、一般教員が教育相談活動を通じて自傷行為を含む生徒のメンタルヘルス上の問題に対応していかなければならない状況にある。

欧米では自傷行為を“Non-suicidal Self-injury (NSSI)”(非自殺的自傷)と称する場合もあり

(Nock et al. 2006, Selbey et al. 2012)、松本(2009)はそれに従って、自傷行為を「自殺以外の意図から、非致死性の予測をもって、故意に、そして直接的に、自分自身の身体に対して非致死的な損傷を加えること」としており、本研究でもこの定義に従う。

日本の、自傷行為に関する研究は、これまで自傷行為をする生徒の比率、開始時期や要因等に関する疫学的調査(Matsumoto et al. 2008, 山口亜希子他 2004, 2005, 2006, 浜田他 2009)、さらには、自傷行為をする生徒の心性に関する量的研究(山口豊他 2014, 佐野他 2013)がされてきた。そこでは、自傷行為当事者(以下、自傷者)の自尊感情が低いことや他の自己破壊的傾向と親和性があること、心理的防衛が弱いことなどが明らかになっているが、学校での対応方法を指摘した研究は少ない。自傷行為への対応については、養護教諭への自傷対応の実態に関する調査(松本他 2009, 佐久間 2011)があるだけである。しかし、それも養護教諭が自傷行為をする生徒への対応に苦慮しているという実態が浮き彫りになるだけで、養護教諭を含む教員が自傷行為を行っている生徒にどのように対応するか、その方法論は明らかになっていない。それは、自傷行為に対する調査や研究が、調査による悪影響を関係者が怖れるため、中学校や高校などの現場で行いにくいからだと考える。

そのような中、坂口(2013)は、学校現場での調査ではなく、インターネットの上の自傷をする高校生のブログでの語りを自傷者の視点に立った質的データとして、シャーマーズ版GTA(Charmaz 2006)を用いて研究を行っている。そして、“自傷をする自分を受け入れてくれる”という体験から始まる“サポートされたと感じるプロセス”によって、教師との関係が強化され、自傷が改善する可能性を示している。坂口の研究からすれば、学校教員が自傷をする生徒を受け入れたりサポートしたりする姿勢をとることが有効な支援方法になるという仮説が提示されたことになる。

このように坂口は自傷者の視点に立った語りを直接分析することで、有効な支援方法への手がかりを得ている。坂口のように自傷者の語りを質的データとして分析することで、より有効な支援方法を探ることができるのではないかと考える。

自傷行為への支援方法を追究するためには、自傷者がなぜ自傷行為を開始し、それがどのように維持され、回復していくかを、自傷者の語りから明らかにしていくことが有効であろう。そして、そうした自傷者の語りにみられる自傷行為の開始、維持、回復の過程に、家庭や学校等の彼らを教育したり支援したりする人々がどのように関わり影響を与えるかを明らかにすることは有効な作業となるであろう。

そこで、本研究では学校現場で自傷行為をする生徒への相談や支援をする中で得た自傷者の相談の語りや自傷行為に対するインタビューでの語りを分析することで、自傷者がなぜ自傷行為を開始し、維持し、回復させるのか、その時家庭や学校がどのように関わったかを明らかにし、自傷行為をする生徒に学校教員としてどのように対応していくか方法論の仮説を得たい。

(2) 定時制高校について

本研究では、県立の定時制単独高校在籍の生徒を調査対象とした。近年定時制高校は、勤労学生の学びの場としての役割を弱め、様々な理由から全日制高校に通えない生徒を受け入れ(柿内他 2010)、支援成長させる高校としての機能を果たすようになってきている。そのため、定時制

高校には、不登校経験者や精神疾患、発達障害、学力不足等多様な問題を抱えた生徒が大勢在籍するようになった(大谷・柿内 2012)。自傷行為の経験率も高い(田中 2012, 佐野他 2013)。従って、定時制高校を対象とすることで、自傷行為当事者(以下、自傷者)から多くのデータを入手することができる。また、自傷行為発生率の高い定時制高校独自の有効な対応方法も緊急に求められている。学校での教師の自傷への対応方法が明らかになってない中、その結果は、定時制高校生以外の学校での自傷者へ対応方法に示唆を与えるものになると考える。

(3) 自傷者から自傷行為についての語りを聞き取ることの適否

自傷者から質的データを入手するのが、困難な主な理由は、自傷者にインタビューしたり、語らせたりすること が、自傷行為に悪影響を与えることが懸念されるからであろう。しかし、Linehan (1993)は、弁証法的行動療法のセッションの場で、クライアントに自傷行為を含む自殺関連行動について十分語らせ機能分析していくことで、問題を改善させている。また、Shea (1999)は、自殺専門医の立場から、自殺に関する話題をオープンに話す ことで支援の可能性が高まることを指摘している。

本研究でもいくつかの倫理的条件の下、自傷者に対して、自傷について尋ね、十分語らせることを試み、考察を行った。それらの語りは、自傷行為について学校現場で相談に乗る中での自傷者の語りの記録であり、自傷行為の予防、改善のために自傷者にインタビューを行った時の記録である。

(4) 自傷行為と居場所に関する研究について

本研究では、自傷行為を自傷者の居場所の問題と関連させて検討する。それは、学校で自傷者の相談に乗る時、自傷者が“居場所がほしい”あるいは“居場所がない”と語ることがあったからである。また、学校が居場所機能を提供するということが、児童生徒の心の問題への対応として重要視されていることからである。このように、自傷行為と居場所との関わりは重要な問題であるにも関わらず、両者の関連について明確に追究した研究はこれまでみられない。

「居場所」という言葉は、「居る場所」というような字義通りの用い方しかされていない時期がかつてあった。しかし、近年になって、日本では、居場所という言葉が、心理的安定をもたらす場としての意味を持つようになり、心理学や心理的支援に関連する重要な概念の1つになってきている。そのため、日本では居場所について研究が盛んに行われるようになり、その定義や内容について議論がなされ、尺度も作成された(石本, 2009; 斉藤, 2007)。

しかし、居場所を心の拠り所と捉える考え方は日本でも 1980 年代頃からであり、英語圏においてこの居場所にあたる明確な概念がまだみられない。このような居場所概念は近年になって日本独自に注目され発展してきた概念である。

これまでの居場所のとらえ方は、多くの研究において、学齢期や青年期における、心理的安定を回復したり実現したりすることを期待された二次的な場としてのものである。しかし、自傷者が“居場所がない”と語る場合、その居場所とは生誕以来の根源的なものではないか。

北山(1993)は、Winnicott(1965)の「抱える環境(holding environment)」を「居場所」と表現し、それは「ほどよい母親(good enough mother)」による母子二者関係の中で形作られるものであるとしてい

る。そして幼い時、母子関係の中で「居場所」を形成できなかったクライアントに対して、治療室が「抱える環境」となり、「居場所」を提供することが必要であること、さらには、人間が対象と関わる際に「いること」を可能にしているのが「抱える環境」であり、「居場所」であると述べている。

本研究においても北山の指摘するように、「抱える環境」を提供する機能や場を、「居場所」として定義する。それは、当初、母親をはじめとした家庭において提供され、そして、その後成長過程で、学校や友人関係、さらには職場等に拡充していくことで、人は心理的に安定して成長をしているものと考ええる。

一方、Balint (1969)は、精神分析的対応が通じず、二者関係でしか対応できないクライアントの状態を「基底欠損 (basic fault)」という概念で表現している。これは、Winnicott が指摘する「抱える環境」が与えられなかったため、二者関係にとどまるクライアントの状態を示すものと考え得る。本研究においても、自傷者は、幼少時から「居場所」が存在しないという体験を語る。この状態は「居場所欠損」という表現がふさわしい。「居場所」が欠落した状態を、Balint の fault の訳語にならって「欠損」という言葉で表現する。「欠損」という表現によって、最初から「居場所」が欠落していることを示す。

そして、本研究では、「居場所」の問題と自傷行為の発生改善がどのように関係するか、追究する。

(5) 倫理的配慮

著者が相談係教員として勤務し十分な配慮や対応、支援ができる A 県 B 高校の生徒のみを対象に行った。校長の許可を得、同校配置のスクールカウンセラーのスーパーバイズを定期的を受けた。インタビュー協力者には、研究や面接の意図に関する理解と同意を得た。研究発表にあたっては、本人が特定されないよう、具体的内容の公表を最小限にし、また、公表予定の原稿を、本人ないし保護者にみせることで同意を得た。調査の時期の範囲が広いことで、結果として個人を特定できなくしている。

調査対象者の 12 名はいずれも十分支援する中で、調査者(相談係教員)との人間関係・信頼関係を形成できた生徒である。面接後、いつでも調査者と連絡をとれるようにしており、状態が悪化した場合、直ちに連絡するよう面接終了時に約束した。12 名中 1 例も、面接後に自傷等の状態が悪化したという報告はなかった。また、面接直後調査者の方から、学校場面等で本人の状況の悪化がないかどうか見届けている。

2 M-GTAに適した研究であるか

本研究のデータ分析には、自傷行為の開始、維持、改善というプロセス性があること、自傷者と支援者との相互作用がみられる現象であること、質的研究法の中で最も方法論が確立しているものであることから、M-GTAを採用する。しかし、その上で、本研究では以下の観点からM-GTAに修正を加えて用いたい。

第一に、西條(2008)の提唱する質的研究のメタ理論である SCQRM では、木下(2005)の「基本的な考え方、エッセンスの部分の理解が重要なのであって、具体的な形には研究者自身の判断によってある程度のヴァリエーションがあってもかまわないのである。むしろすべての手順を厳密に

踏襲するよりも、どこかに自分で修正をして自分版の方法としていくことが期待されている」を引用し、構造構成主義の立場から研究者の「関心相關的」観点を重視し、「研究目的を踏まえつつ、どこをどう修正したか、理由を明示する」ことができるなら、既存の研究法を修正して使用することが可能であり、それを「関心相關的研究法修正法」と名付けて定式化し、M-GTAの修正について論じている。

さらに、三毛(2005)は「GTAの多用は、社会福祉学からみて無意味な概念を乱造するという事態を招く」恐れあり、それを避けるため、先行研究の文献レビューをきちんと行い、研究テーマと研究目的を考えた上で、「社会福祉学実践理論の体系や他の理論の体系と照らし合わせて、自分の生成した概念を位置づけ検討すること」「研究テーマに関連した先行研究に照らし合わせて、生成した概念を位置づけ検討すること」を強調し「理論体系の中で生成した概念を十分位置づけることができれば(中略)意味をなさない」としている。

本研究は、喫緊の課題となっている学校教員の自傷者への対応方法に関する有効な概念の生成やプロセスの解明を研究目的としている。学校教員や学校関係者に理解を得るために、先行概念との整合性を考えながら、概念やカテゴリーの命名を行う。そして、既存の概念にデータにみられる現象を有効にとらえるものがみられた場合、その概念を用いて概念やカテゴリーを生成したい。そのため、従来のM-GTAの研究に比べて、既存の概念への依存度が高くなる（grounded on data ではなくなる恐れがある）。

3 分析テーマ

学校教員が支援することで、生徒の自傷行為が改善していくプロセスに関する研究

※1 周囲の人間の影響によって自傷行為が開始・維持されていくプロセスに関する研究

※2 周囲の人間の影響によって自傷行為が改善していくプロセスに関する研究

4 調査対象者

調査対象者は、調査者が定時制高校の教育相談係教員(学校心理士、臨床心理士の資格を持つ)として日常的に相談支援に関わっていた生徒のうち、自傷を行っていた生徒 12 名である (Table 1 参照)。

5 調査実施とデータ収集の時期

2007 年 8 月から 2014 年 1 月まで。

6 インタビューガイド、データの取得方法

自傷者の支援のヒントを得るという目的で、支援者(著者)と信頼関係ができている自傷者の了解を得て、自傷行為に関する半構造化面接を行った録音を逐語記録に起こした。

半構造化面接では、①自傷開始前の家庭や学校の状況、②自傷開始のきっかけ、③自傷行為

をする理由、④現在の自傷行為の状況頻度、⑤最近の自傷行為エピソード、⑥自傷以外の自己破壊的行動、⑦自傷中断の理由やきっかけ、⑧自傷が改善した場合その理由や背景等について確認した。

インタビュー前に「自傷行為について研究しているから自傷について教えてほしい。今日はぼくが君から教えてもらう。」というスタンスで尋ねると、自傷者が堰を切ったように話した語り。ほとんどの語りの内容が家族関係で苦しんだこと小中学校でのつらい体験、そして、そういうことから自傷に至った経緯についてのもの。

分析の際、支援者(著者)が自傷者の相談に乗ったり支援したりした時に書いた相談日誌(支援記録)も参考にしている。

最初は 8 名の対象者からインタビューを終えた段階で、データの分析をはじめた。8名だけのデータでは理論的飽和化にいたっていないと思われたため、追加してインタビューを行っていき、12名のインタビューを終えた段階で理論的飽和化に至ったと判断した。特に、自傷行為が著しく改善した卒業生からのインタビューの入手が理論的飽和化に至るきっかけとなった。

分析ワークシート(Table 2 参照)を用いて、研究する人間の立場から、関心相関的に(西條、2008)、データを読み、概念生成を行った。各概念名は、データに基づきつつも、その命名が支援のヒントになるような意図をもって行った。

特に、データから作成する概念が「居場所」、「欠損」等の既存の概念(用語)に当てはまる場合は、あえて既存の用語を用いて概念を生成した。いたずらに、新規な概念を作成するよりも既存の用語や概念との関連を持たせた方が、その概念に基づいた発想をしやすく支援の応用につながりやすいと判断したからである。

概念の生成にあたっては、対極例や相対する概念を視野に入れ、継続的比較分析を行った(Table 3, Figure 1)。

7 結果

結果図(Figure 1)およびストーリーライン参照

8 考察

結果から得られる考察及び支援方法

1. 自傷行為の支援と居場所

居場所という概念を Winnicott の「抱える環境」と捉えることで、出生直後から高校卒業前後の年齢に至る過程をみた。そして、自傷行為の背景には一貫して「居場所の欠損」という問題があること、そのため、その支援は彼らの成長段階に応じて、なんらかの形で居場所的なものを提供することが重要であることを確認した。

2. 学校の居場所機能欠損と自傷者支援

従来の研究では自傷行為や自殺関連行動に至る背景については、家庭環境的要因についての指摘があった。しかし、本研究では、自傷行為の発生前史として、「家庭」→「学校」→「思春期に

おける家庭」の3段階の居場所欠損の経過があるのではないかと仮説的に提示した。そして、学校における居場所のなさを自傷行為発生的重要原因の1つであると考ええる。

3.自傷行為の居場所化について

自傷者の語りを聴いていると、他の居場所やはけ口がなさすぎて自傷行為を唯一の居場所のようなものにせざるをえない気持ちが確認できる。従って、＜自傷行為との一体化・居場所化＞という概念名は、この自傷行為を居場所とせざるをえないような自傷者のぎりぎりの心理状態について支援の立場から理解するためのものである。

4.改善キーパーソンについて

自傷者は、自傷行為で自己表出することで、結果として、自傷者を取り巻く人々(友人、恋人、教員、スクールカウンセラー、医者等)が支援者として立ち現れる。そうした支援者の何人かは、関わり方を間違えたり、期間が短かったり、継続的支援に失敗する。しかし、そうした支援者の一部で次の条件を満たす者が改善キーパーソンとなる。

- ①自傷者の気分の浮き沈みや動揺に巻き込まれつつも巻き込まれすぎず適度な距離を保ち続ける。時々失敗はしながらもほどよい支援的立場を保つ。「ほどよい母親」に似た役割を果たし、「抱える環境」を提供する。
- ②自傷者と日常的に接する機会があり、生活全般の相談に乗ったり支援したりできる。
- ③自傷行為そのものを否定も肯定もせず、全人格的に自傷者に関わる。
- ④数年単位の長期にわたって自傷者に関わり続けることができる。

5.学校における支援機能

12名の事例をみると、自傷行為の回復は、高校に入学して支援が入ってから高校を卒業するまで数年単位の過程をたどる。こうした数年単位の日常的支援は学校でしかできないことである。

9 カテゴリー生成

本研究は、自傷者の語りというデータに基づきながらも、一方で既存の概念である「居場所」とその「欠損」「回復」という言葉を手がかりに、概念やカテゴリー生成を行うことを意図している。

まず、自傷者は劣悪な家庭環境を語る。このことを、「家庭の居場所機能欠損」と概念化した。先行研究でも自傷者の家庭環境が悪いことは、すでに当たり前の事実となっている。ところが、自傷者の語りからは、その後学校環境も劣悪だったことが執拗に語られ圧倒される。まるで、学校環境こそが直接の自傷行為開始のきっかけではないかと思わせるほどである。これを「学校での居場所機能欠損」と表現した。従来の研究に比べて、本研究では、自傷行為開始における学校環境要因の大きさを強調している。そのことは自傷者の語りの読み込みやから考察したことである。学校は家庭に対して外であり、家庭の対極にあるものと考えられる。

もう一つの対極的な考え方として、「学校の居場所化」を想定した。そこには、家庭が劣悪であっても、学校が居場所機能を果たしていれば、自傷行為が防げたのではないかという期待からである。しかし、調査対象者はすべて自傷行為をしている生徒なので、「学校の居場所化」に該当するデータを得られなかった。そして、自傷者の語りでは、いじめや教員の対応等が語られ、その結

果、どこにも居場所がない状態を語られ、最終的に身体だけが居場所となるような語りがみられる。そして、こうしたどこにも居場所がなく身体しか居場所とならないような状況をまとめて、{絶対的居場所欠損状態}というカテゴリーを生成した。

続いて、「最初の自傷行為」エピソードがあり、「表出としての自傷」という概念を生成した。それは、自傷者に「自己表出不全」という概念との対極概念として対応するものである。「自己表出不全」を含めて{絶対的居場所欠損状態}にある者が、「自傷への一体化、居場所化」を果たす中で、やっと自己表出ができる状態である。また、同時に自傷者は自傷仲間と共鳴し、そこも居場所とする。これらの概念をまとめて{自傷行為の居場所化}とした。

「自傷への逡巡葛藤」や「居場所の模索」が起き、それに対応する概念として「改善キーパーソン」の継続的関わり」がなされ、「居場所の獲得」や自傷からの「改善と回復」が起こる。この一連の改善段階をまとめて{居場所の獲得による自傷改善}というカテゴリーを生成した。

10 ストーリーライン < >概念、{ }カテゴリー

自傷行為当事者は、<家庭での居場所機能欠損>を味わい、その後学齢期になって<学校の居場所機能欠損>を経験し、家庭に引きこもるが、そこでもまた<思春期における家庭での居場所機能欠損の再確認>を体験する。自傷者の<自己表出不全>と相まって、{絶対的居場所欠損状態}に至る。

なんらかのきっかけで<最初の自傷行為>を行った結果、<自傷による安寧体験>をし、<自傷への一体化・居場所化>が起こる。同時に他の<自己破壊行動との一体化>にも陥る。一方、<最初の自傷行為>は、自傷者の<自己表出不全>とは対極の<表出としての自傷>であり、その結果<他人との自傷の共鳴>関係に入っていく。こうしたことから自傷者は{自傷行為の居場所化}に陥っていく。

一方、自傷者は、<自傷への逡巡葛藤>を味わい、<居場所の模索>を始める。と同時に居場所的なものに対して<居場所を失う恐怖感>を味わう。その過程の中で、自傷者の中には<改善キーパーソンの継続的関わり>を体験するものがある。改善キーパーソンを居場所にするか、その人物をステップとして、<居場所の獲得>に至る。そうして自傷行為の<改善と回復>をしていく。そのときには、同時に<家庭環境の改善>も起こる場合があり、自傷者は、{居場所の獲得によって自傷改善}を果たしていく。

11 理論的メモ、ノートをどのようにつけたか、また、いつどのような着想、解釈的アイデアを得たか。

当初、「居場所」の問題と絡めずに、自傷行為の語りを分析していた。自傷者が、家庭のみならず、学校の教員に対してもきちんと対応してもらえなかった経験を語るデータをすべての調査対象者から得たことで、自傷の原因として学校要因も大きいのではないかと考えるようになった。学校の教員の対応のまずさが、自傷行為のきっかけとなっていると思われる自傷者の語りからみられた。そのことを仮説的に指摘することだけでも重要かと考えた (Figure2)。

やがて、勤務校での実践や研究が長期に及ぶようになり、自傷者の中に改善する者が現れてきた。そこで、改善した自傷者(卒業生)からデータを得、自傷の開始から改善までを見通せるようになった。その際、居場所概念を用いて説明した方が一貫性をもって説明できると判断した。特に、「改善キーパーソンの継続的関わり」という概念が自分としては一番重要な概念である。

1 2 M-GTAに関する理解と疑問点

- ・自傷行為への学校教員としての対応方法をさぐるため、自傷行為当事者の質的データをM-GTAを用いて分析していましたが、あまりうまくいきませんでした(Figure2)。そこで、「居場所」という既存の概念を用いて、データをもう一度分析してみたところ、その方が一貫性をもって説明できたり、新しい知見を得られたり、説明しやすいと考えるようになりました。しかし、その結果、既存の概念にとらわれすぎ、グラウンド・オン・データになっていないと思います。
- ・実践していく場合や方法論を伝えていく場合、既存のデータから概念を作った方が、自傷行為への対応方法の研究に関してはわかりやすい感じがします。
- ・従って、自分の研究目的や意図は、M-GTAさらにはGTAに向かないのではないかと考えてみました。むしろ複数事例研究のような形の方が向いているのかと感じています。
- ・ただ、逆にスーパーバイザーから、そうした居場所等の概念を最初に持ってくるのではなく、データの分析から抽出するようにした方がよいのではないかと助言いただき、その通りだとも感じています。
- ・さらに、西條(2008)のいうようなM-GTAの修正については、どうなのか。あるいは、M-GTAの分析ワークシートを用いながら、複数事例研究のようにしてしまうのはありなのかとも考えました。
- ・自分は坂口(2013)の用いた別のGTAの影響を受けました。そのため最初、「カテゴリー、概念、データ一覧表」を作成してしまいました。坂口の用いたGTAにも魅力を持ちました。データがそのまま表になって出ることから概念生成の過程を論文を読みながらたどれるからです。ある研究者がM-GTAを、別の研究者が別のGTAを選ぶのは、どのような基準からか。さらには、GTA以外の質的研究を選ぶのはどのような背景があっただろうか、知りたいです。

1 3 引用文献

- Balint, M. (1969). The basic fault: Therapeutic aspects of regression. London: Tavistock Publications. (バリント, M 中井久夫訳(1978). 治療論からみた退行 基底欠損の精神分析 金剛出版)
- Charmaz, K. C. (2006). Constructing Grounded Theory: A Practical Guide through Qualitative Analysis. California: Sage Publication Ltd. (シャーマンズ, キャシー 抱井尚子・末田清子(監訳) (2008) グラウンデッド・セオリーの構築 ―社会構成主義からの挑戦― ナカニシヤ出版)
- 浜田祥子・村瀬聡美・大高一則・金子一史・吉住隆弘・本城秀次(2009). 高校生の自傷行為の特徴―行為ごとの経験率と自傷行為前後の感情に注目して― 児童青年精神医学とその近接領域, 50(5), 504-516.
- Hawton, K., Rodham, K., & Evans, E. (2006). By their own young hand: Deliberate self-harm and suicidal ideas in

- adolescents. London, UK: Jessica Kingsley Publishers Ltd. (ホートン, K・ロドハム, K・エヴァンズ, E. 松本俊彦・河西千秋(監訳) (2008). 自傷と自殺—思春期における予防と介入の手引き— 金剛出版)
- 石本雄真(2009). 居場所概念の普及およびその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀, 3, 93-100.木下康仁(2007) ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂
- Jacobs, D., Walsh, B., McDade, M., & Pigeon, S. (2009). Signs of self-injury: ACT to prevent self-injury high school implementation guide and resources. Screening for Mental Health, Inc and The Bridge of Central MA. (ジェイコブ, D・ウォルシュ, B・マックデイド, M・ピジョン, S 松本俊彦(監訳)(2010). 学校における自傷予防—『自傷のサイン』プログラム実施マニュアル金剛出版)
- 柿内真紀・大谷直史・太田美幸(2010). 現代における定時制高校の役割 鳥取大学生涯教育総合センター研究紀要, 6, 1-25.
- 川谷大治(2009). 自傷とパーソナリティ障害 金剛出版
- 木下康仁(2005). 分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ 弘文堂
- 北山 修(1993). 日本語臨床の深層 第3巻 自分と居場所 岩崎学術出版社
- Linehan, M.M.(1993). Cognitive-behavioral treatment of borderline personality disorder. New York: The Guilford Press. (リネハン, M.M. 大野裕(監訳)(2007). 境界性パーソナリティ障害の弁証法的行動療法 —DBTによるBPDの治療— 誠信書房)
- 松本俊彦(2009). 自傷行為の理解と援助—「故意に自分の健康を害する」若者たち— 日本評論社
- 松本俊彦(2011). アディクションとしての自傷—「故意に自分の健康を害する」行動の精神病理— 星和書店
- Matsumoto, T., & Imamura, F. (2008). Self-injury in Japanese junior and senior high-school students: Prevalence and association with substance use. Psychiatry and Clinical Neurosciences, 62, 123-125.
- 松本俊彦・今村扶美・勝又陽太郎 (2009). 児童・生徒の自傷行為に対する養護教諭が抱える困難について—養護教諭研修会におけるアンケート調査から— 精神医学, 51(8), 791-799.
- 三毛美予子(2005). M-GTAを用いた社会福祉実践研究の実践と研究への助言——これからM-GTAを用いる人へ—— 木下康仁(編著) 分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ 弘文堂
- Nock, M. K., Joiner Jr, T. E., Gordon, K. H., Lloyd-Richardson, E., & Prinstein, M. J. (2006). Non-suicidal self-injury among adolescents: Diagnostic correlates and relation to suicide attempts. Psychiatry Research, 144, 65-72.
- 大谷直史・柿内真紀(2011). 定時制高校における生徒像の変容と生徒指導方針 鳥取大学教育研究論集, 1, 3-9.
- 佐久間浩美(2011). 自傷行為を繰り返し自殺企図のある生徒に対する学校生活を適応プログラムの実践と検討—事例を通して学校における支援体制および養護教諭の役割を考える— 日本健康相談活動学会誌, 6(1), 89-106.
- 西條剛央(2008). ライブ講義・質的研究とは何か (SCQRM アドバンス編) 新曜社
- 斎藤富由起(2007). 大学生および高校生における心理的居場所感尺度作成の試み 千里金蘭大学紀要. 生活科学部・人間社会学部, 4, 73-84.
- 佐野和規・加藤哲文(2013). 青年期の自傷行為とスピリチュアリティ・死生観との関係について—一定時制高校在籍

- 者を対象とする分析 ― 学校メンタルヘルス, **16**(2), 140-151.
- 佐久間浩美(2011). 自傷行為を繰り返し自殺企図のある生徒に対する学校生活を適応プログラムの実践と検討―事例を通して学校における支援体制および養護教諭の役割を考える― 日本健康相談活動学会誌, **6**(1), 89-106.
- 坂口由佳(2013). 自傷行為をする生徒たちに対して学校はどのような対応をしているのか ―自傷行為経験者のブログから― 教育心理学研究, **61**, 290-310.
- Selbey, E. A., Beder, T. W., Gordon, K. H., & Nock, M. K. (2012). Non-suicidal self-injury (NSSI) disorder: A preliminary study. *Personality Disorders: Theory, Research, and Treatment*, **3**, 167-175.
- Shea, S.C. (1999). *The practical art of suicide assessment :Guide for mental health professionals and substance abuse counselors*. New York: John Wiley & Sons (シア, S.C. 松本俊彦(監訳)(2012). 自殺リスクの理解と対応―「死にたい」気持ちにどう向き合うか―金剛出版)
- 単行本 - 2006/8/1
- 高原晋一(2006) アメリカのスクールカウンセリングー1人の子どものニーズに応えるシステム ほんの森出版
- 田中志帆(2012). 定時制高校での教育相談, スクールカウンセリングにおける今日的課題 青山学院女子短期大学紀要, **66**, 79-92.
- 若山隆(2001). ころとからだの在るところー私たちの居場所の問題ー (〈特集〉現代の心と体) 現代と文化 ,105, 67-82
- Walsh, B. W. (2005). *Treating self-injury: A practical guide*. New York: The Guilford Press.
- (ウォルシュ, B.W. 松本俊彦・山口亜希子・小林桜児(訳)(2007). 自傷行為治療ガイド 金剛出版)
- Winnicott, D.W. (1965). *The maturational processes and the facilitating environment: Studies in the theory of emotional development*. London: The Hogarth Press and the Institute of Psycho-Analysis, 1965. (ウィニコット, D.W. 牛島定信訳(1977). 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社
- 山口亜希子・松本俊彦(2005). 女子高校生における自傷行為ー喫煙・飲酒, ビアス, 過食傾向との関係 精神医学 **47**(5), 515-522.
- 山口亜希子・松本俊彦(2006). 女子大学生における自傷行為と過食行動の関連 精神医学 **48**(6), 659-667.
- 山口亜希子・松本俊彦・近藤智津恵(2004). 大学生における自傷行為の経験率ー自記式質問票による調査 精神医学 **46**(5), 473-479.
- 山口豊・中村結美花・窪田辰政・橋本佐由理・松本俊彦・宗像恒次(2014). 自傷行為と心理特性との関連についての予備研究 東京情報大学研究論集 **17**(2), 13-20.
- 山岡俊英(2002). 大学生の居場所とセルフエスティームに関する一研究 佛教大学教育学部学会紀要, **1**, 137-167.

【研究会でいただいたコメントのまとめ】

- ・発表者(私)が、学校における自傷行為について、なにが今問題か、なにを問題としてとらえているか、明確にしていけるべきである。特に、影響を受けたとされる先行研究を踏まえて、何を問題ととらえるのか、明確にした方がいい。それが明確でなければ、分析テーマも決まらない。

- ・何を自分が明らかにしたいかということがあって、その上で、どの研究方法を選択するかを決める。発表者のように、M-GTAでやるかどうか、定まっていらないのに、分析テーマや分析焦点者を決めるのはたいへんだったのではないかな。
- ・明らかにしたいことが、たくさんあってわかりにくい。その生徒が様々なことを語っているからではなく、発表者が、学校でそういう相談をうけながら、先行研究の影響をどう受けて、どの点に問題意識を絞り込むのか明確にさせた方がいい。
- ・自傷行為をする生徒が「居場所がない」と言っていることを、既存の「居場所」や「抱える環境」という概念で簡単にまとめてしまうのではなく、その生徒にとって居場所とはなんだろうかと考えていったらどうか。そういう分析にM-GTAは合っている。
- ・「学校教員の関わり」「学校教員の支援」という研究テーマや分析テーマは大きすぎるのではないかな。どこからどこのプロセスをみたいのか、自分の中で考えしぼって分析考察するのがよいのではないかな。「学校教員」の部分は博士論文の考察の中で議論をしたらどうか。
- ・だれの経験を扱うのかを考えた時、自傷行為をする生徒の経験を扱うのであって、支援する教員の経験のプロセスを扱うのではないはず。分析テーマに「学校教員」を入れない方がいいのかもしれない。生徒の経験の全体のプロセスがみえてきた中で、学校教員の影響を次に追究する。
- ・どこを見るかも大事であるが、どのように解釈しどのように表現していった時に、現場がどう改善できるかという視点も大事である。
- ・自傷行為をする生徒がどのように体験しているか、データを分析焦点者の視点から概念化するのがポイントである。発表者は、「研究する人間の立場から」分析するとあるが、分析焦点者の立場からしっかり分析することが必要ではないかな。例示された分析ワークシート(「改善キーパーソンの継続的関わり」)をみても、その具体例、分析焦点者から、このような概念や定義が出ていると思われない。

【感想】

スーパーバイザーの倉田先生はじめ、フロアーの先生方から多くの適切なお助言や励まし、「慰め」をいただきありがとうございました。

倉田先生からは約1ヶ月に渡り、回数的にも内容的に異例の濃いスーパーバイズを受け、この期間、質的研究やGTA、M-GTAについて考えさせられ、悩み、研究のことが夢にまで出てくるようになりました。

当日の発表を含めたそうした過程を経て、自分がM-GTAについて誤解したり勘違いをしたりしている部分があることに今更ながら気づきました。既存の概念に頼るのではなく、もう一度、M-GTAの方法に乗っ取って、ボトムアップ的にデータを分析し直してみたら、何かもっと見えてくるものがある、このデータをM-GTAにしっかり基づいてもう一度分析してみないともったいないと思うようになりました。

また、M-GTAにするかどうか以前に、研究への向き合い方として、自分の問題意識を持ち、研究テーマや分析テーマをしぼっていくことの重要性を改めて教えていただいたような気がします。

一方、今回のこうした経験によって、M-GTA含めて質的研究について根本的に考えてみたいと思うようにもなりました。概念の生成とはどういうことか、既存の概念とボトムアップ的な概念との関係はどうあるべきか、等々、木下先生の『質的研究と記述の厚み』を含む、様々な質的研究に関する著作を取り寄せ読みはじめ、考え出したところです。

今後は、データをもう一度M-GTAの方法に基づいて分析し直して行きたいと思っています。それとは別に、既存の概念をどう質的研究に活用するかという問題も考えていきたいと思っております。

ありがとうございました。

【SV コメント】

倉田 貞美（浜松医科大学）

佐野さんは、定時制高校の教員として生徒相談や生徒支援の活動をなさっている。近年、「定時制高校は勤労学生の学びの場としての役割を弱め、様々な理由から全日制高校に通えない生徒を受け入れる場」となり「不登校経験者や精神疾患、発達障害、学力不足等多様な問題を抱えた生徒が大勢在籍する」とのことであった。佐野さんの勤務校においても“自殺以外の意図から故意に直接的に自分自身の身体に対して非致命的損傷を加える、いわゆる自傷行為”をする生徒が増加していて、その現状への危機感から、教員としての有効な支援方法を探る研究に取り組まれているとのことであった。

これまでの自傷行為に関する研究には質的な研究が少ないことから、自傷行為をする生徒の相談に乗る中で得られた語りの記録、インタビュー内容について、M-GTAを用いて分析したいとのことであった。ご本人も自覚しておいでであるが、独学であったことから佐野さんは M-GTA ではない GTA の手法との混乱、M-GTA についての誤解があり、迷い道の中におられた。しかし、この 1 か月のやり取りを通して、いろいろ気づかれることがあり、先のほうに明るい出口を見出されたようである。

約 1 か月の間 SV としてやり取りをさせていただくなかで、生徒の語りの一部から孤独なせっぱつまった心情が伝わってきて、佐野さんの取り組みに、私は強く引き付けられるものを感じている。

迷っていた点について、以下 2 点に関して私見を述べさせていただくので、参考にしていただければ幸いです。

1. 研究テーマが絞りきれないことについて

この研究で何を明らかにしたいのか？と何度も問いかけさせていただいたが、最終的な答えは「自傷行為をする生徒に学校教員として学校教育の中でどのように対応するのが、彼らの自傷行為にプラスに働くのか」で、「もう少し広げると、自傷行為の開始、維持、改善過程に周囲の人間たち(家族、教員、友人、恋人、カウンセラーなど)がどのような影響を与えているのか。その中から学校教員としてどう関わり、どんな学校環境を与えていくのが良いのか、見えてくるものは何か？」であると続けられ「そこで、自傷行為当事者がなぜ自傷行為を開始し、維持し、回復させるのか、その時周囲の人間がどのように関わったかを明らかにし、自傷行為をする生徒に学校教員としてどのように対応していくか方法論の仮説を得たい。」と記され、自傷行為の開始の時の周囲の人間との関わりまでを明らかにするとのことであった。

しかし、自傷行為の開始時期は何年も遡らねばならないことが多いと思うが、自傷開始時のさまざまな背景となる相互関係(その時の学校の特性・家庭・引き金の出来事・友好関係・精神心理的条件、通院の有無等)の事実を、生徒の語りだけから、明らかにすることは不可能ではないだろうか？「自傷行為の開始、継続関わる周囲の人間がどのように関わったかを明らかにする」ことは佐野さんにとってのテーマではなく、あくまでも佐野さんの研究的関心は学校教育の中での教員としての有効と考えられる支援方法を明らかにすることなのではないか。もちろん生徒にとって教員のかかわりが有効な支援となるためには、自傷行為のさまざまなそれらの背景を知ることは必要ではあるますが、生徒とのやり取りの中で把握できるのは、過去のそれらのことを当該生徒がどのように受け止めてきたのか、高校の相談担当教員に伝えたいと生徒が思っている内容であって、事実とは性質の異なるものです。もし、ちょうどまさに今初めて自傷行為を始めるようになったとしても、家庭のこと、引き金になった出来事・友好関係、医師等との関係についての語りも、それは事実というより、やはり生徒がどう認識しているかの範囲のことしか語られない。周囲の人間がどのように関わったかを明らかにするためにはその時の状況を多面的に知らなくてはならないが、生徒の語りからのみでは無理なことだ。これらのことを再考され、佐野さんにとって納得できる研究テーマへと絞り込んでいただきたいと思います。

2. 「居場所」との関連で分析することを前提にすること

レジメ p2 の(4)自傷行為と居場所に関する研究についての項で、佐野さんは「居場所」とは字義どおりの意味にとどまらず、自傷行為をする生徒にとっては、単なる居る場所だけを意味しない心の拠り所である重要性を秘めていると述べておられる。したがって、本研究の分析は前提条件として「居場所」と関連させるとしている。

しかし、それは、問題意識の項で分析の前提として述べるべき内容ではなく、これこそが、生徒にとっての語りの意味を相談にあたった教員である佐野さんが、今生徒の前に存在する一人の人として意味をとらえようとしている解釈そのものだと思う。佐野さんは生徒のどの語りから単なる居る場所を求めているのではないとそう考えたのか、生徒はなぜそれを教員に伝えようとしていると佐野

さんは思うのか、同じような語りにはどのようなものがあるだろうか、対立的な現象はないのかとデータに向き合っていき、解釈したその意味を定義し、概念名を絞りだす作業そのものだと私は思います。だから、ぜひ、分析ワークシートを用いて、豊かな思考錯誤を経て、重要な概念になると予感される単なる居場所を意味しない内容を伝えうる概念名を創出していただきたいと思います。

佐野さんは、自傷行為をする高校生のブログ内容を分析し「“自傷をする自分を受け入れてくれる”という体験から始まる“サポートされたと感じるプロセス”」を提示した坂口論文は、「学校教員との関係の強化によって自傷が改善する可能性を示している」と評価し、その影響を強く受けたと何度もおっしゃっていましたが、坂口論文と同じ内容に終わる論文を目指しているわけではないと思います。坂口の言う“自傷をする自分を受け入れてくれる”とは、どのような教員との相互関係を経て生徒に実感されていくのか、データに密着してその動きを概念・カテゴリー間の関係性から説明できる、坂口論文とは異なるリアリティーを伴った論文を目指してほしいと思います。

ぜひ今回の今回の発表を通して、改めて研究テーマ、分析テーマについて再考されて臨地の場である学校で多くの教員が応用できる内容を提示してくださることを期待しております。大変、大変お疲れ様でした。

【第2報告】

千葉 洋平(国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科 助手)

Yohei CHIBA : Kokushikan Graduate School of Sport System Assistant

保育士から見たじゃれつき遊びにおける子どもの態度や行動の変容プロセス

The Process of Changes in Children's attitude and behavior on Physical Play from the viewpoint of childcares

【発表時のレジメ】

研究背景

近年、子どもの態度や行動の面での育ちにくさが指摘され始めている¹⁾。例えば対人的トラブルや落ち着きのなさ、ルール違反といった行動特徴を持つ、いわゆる「気になる子ども」の割合は男児 21.04%、女児 5.58%、全体で 13.43%であったことが報告されている(郷間ら, 2007)。また、「すぐ『疲れた』という」や「保育中、じっとしていない」といった子どもの増加が保育者や教育者の間で広く実感されているという報告もある(阿部ら, 2011)。

¹⁾ 本研究では、子どもを主に幼児から小学校低学年までとしている。また態度や行動の問題を、社会性や集中力、やる気といったの日常生活全般に見られる問題とし、それは特別な支援を必要とする子どもに限定したものでなく、現代の子どもの全般的問題として位置付けている。

態度や行動の問題は、将来の個人や社会にとって重大な意味を持つことが考えられる。個人的には、こうした傾向を持つ子どもほど、その後の高校中退や離婚、失業、あるいは投獄経験といったリスクを負いやすくなることが指摘されている(Gottfredson, 1998)。社会の問題としても、現在、我が国においては、高齢化が急速に進行し、労働人口が減少していくことから、これまでの社会を維持することさえ難しい状況になってきている²⁾。そのため、子どもたちの関心や意欲、あるいは社会性の低下といったこれらの問題は、今後の社会にとって、計り知れない重要な課題として認識する必要がある。

こうした中、じゃれつき遊びと称される遊びが、子どもの態度や行動の問題解決に寄与することがこれまで報告されてきた。じゃれつき遊びとは、大人との関わりの中で逃げる、追う、引っ張る、しがみつく等の多種多様な運動をダイナミックに行う遊びとされ、その実施によって子どものやる気や意思、集中力といった面での発達に一定の効果を及ぼすことが示されている(成田ら, 2011; 鹿野ら, 2012)。

このじゃれつき遊びの定義はいくつか見受けられるものの、現在のところ統一された定義はない。しかし、多くの場合、①大人との関わりや②スキンシップを含めたダイナミックな運動、③型やルールのない自由さといった要素を含む遊びとして捉えられている。そこで本研究ではじゃれつき遊びを、「大人との関わりを持ちつつ、ダイナミックな運動を自由に行う遊び」と定義する³⁾。

従来までのじゃれつき遊びに関する研究では、子どもの態度や行動の問題は、満足感や充実感、あるいはやる気、意思、集中力といった高次神経活動の発達の遅れや歪みから生じているとされ、じゃれつき遊びの実施によってそれを司る大脳新皮質・前頭葉の発達を促す効果があると捉えられてきた。

例えば、西條ら(1984)は、じゃれつき遊びによって子どもの興奮が高まり、そのことから抑制機能が発達し、子どもの落ち着いた行動が実現されるとしている。また野井(2003)は、じゃれつき遊び後に子どもの意欲や集中力が高まるのは、じゃれつき遊びによって覚醒水準が一定以上に高められ、それが子どもたちの「切り替えの良さ」を育てているためだとしている。これらのことから、じゃれつき遊びの実践においては、そこでの興奮が重要とされ、子どもが「ワクワク・ドキドキ」するような機会の実現が図られるべきだとされている(野井, 2007)。

ところでじゃれつき遊びに関わらず、遊びと子どもの変容に関する議論は古くから行われてき

²⁾ 我が国の65歳以上の高齢者率は、2060年には39.9%に到達すると推計されている。(国立社会保障・人口問題研究所(2012)日本の将来推計人口. <http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/newest04/sh2401smm.html>, (参照日 2014 年 10 月 21 日))

³⁾ 井上ら(2011)はじゃれつき遊びを「スキンシップを含むすべての遊び」とし、そこでは逃げる、ぶつかる、しがみつく、引っ張るといった様々な動作や運動が含まれ、その数は無限にあるとしている。さらにそのモデルとして子犬等の動物が楽しげにじゃれあう姿を挙げ、型やルールがないことが他の遊びとの大きな違いであることも指摘している。成田ら(2011)は、井上らが示すじゃれつき遊びの特徴をもとに、「スキンシップを主としており、運動量を確保しながら、コミュニケーションを図る体育的遊び」と定義している。また鹿野ら(2012)は、長年にわたりじゃれつき遊びを行っているS幼稚園で、園児が教師や保護者の背中に飛び重なったり、そのまま分厚いマットレスの上に振り落とされたりして遊んでいる様子から、じゃれつき遊びを「園児と教師だけでなく保護者も一緒になってダイナミックに身体を動かしながら遊ぶ活動」と定義している。

た。例えば、ヴィゴツキー(1976)は、「ごっこ遊び」に注目をし、模倣行為の中で子どもは、実際の年齢よりも年上のように、また実際の自分よりも有能な人物として振る舞いながら、それらの行動やしぐさ、あるいはルールに沿った行動を身に着けていくことを述べている。またカミイ(2008)はピアジェの構成論の立場から、子どもが遊びを通して発達するのは、その中で興味深くかつ自由に活動を行うことで、好奇心や探究心が子ども自身の内部から生じ、より精巧で複雑な知識を利用していくからだとしている。さらに近年では、感覚統合の領域において、発達のための遊びの具体的方法が提示されてきている。そこでは子どもの「平衡感覚の鈍さ」が、姿勢の崩れや多動的行動を生じさせやすくするとし、ブランコでの遊びがその改善に寄与する等の提案がなされている(木村, 2006)。

また遊びの分析には、その特殊性を加味していく必要があることも指摘されている。西村(1989)は遊びの原義が、軽快さや自在さ、揺れ、ゆきつもどりつといった状態を意味していたことから、遊びとは活動ではなく、独特の状態なのだとしている。これを受けて久保(2007)は、スポーツをしていてもそれが仕事のように感じることもあることから、遊びとは状態であり、その状態へ作用するものとは何かが問われるべきであると主張している。

ここまで概観したように、先行研究からは、じゃれつき遊びを通して起こる子どもの態度や行動の変容には、興奮以外の要因が有効に作用していることが示唆される。そして特にじゃれつき遊びによって子どもの変容が顕著に生じるのであれば、その要因は他の活動や遊びには含まれないものであることも考えられる。したがって、じゃれつき遊びの特質に注目しつつ、そこでどのように子どもの態度や行動の変容が生じるのかといったプロセスを実証的に検討する必要性が窺える。

以上のことから本研究では、じゃれつき遊びを初めて行った子どもの担当保育士に対しインタビューを行い、その語りに関する分析から、じゃれつき遊びによって起こる子どもの態度や行動の変容プロセスを明らかにする。また、それによりじゃれつき遊びの支援のための理論生成を目指す。

1. M-GTA に適した研究であるかどうか

本研究は、以下の点から M-GTA を研究方法として採用した。

1)他者との相互作用性

じゃれつき遊びは、子ども同士や大人との関わりの中で実践される。

2)現象のプロセス性

じゃれつき遊びを通じた子どもの態度や行動の変容は、じゃれつき遊びやその後の生活までを含めたプロセスの中で検討される。

3)ヒューマンサービス領域における支援のための理論生成

じゃれつき遊びにおける子どもの態度や行動の変容プロセスを明らかにし、その結果を教育現場に戻すことで、子どもの成長に向けたじゃれつき遊び実践のポイントをより明確にできると考える。

2. 研究テーマ

じゃれつき遊びにおける子どもの態度や行動の変容プロセス

3. 分析テーマへの絞込み

先行研究からは、興奮以外の要因がじゃれつき遊びにおいても有効に作用している可能性があることが示唆された。またその要因には遊びの特殊性が関係していることも推察された。さらに、じゃれつき遊びによって生じる子どもの態度や行動の変容は、他の遊びでは起こりにくいものであることから、じゃれつき遊び特有の要因があることも考えられる。そこで本研究では、分析テーマを「じゃれつき遊びの特質によって子どもの態度や行動が変容していくプロセス」とした。

4. データの収集法と範囲

1) 研究協力者

研究協力者は、東京郊外にある A 保育園の、5 歳児 24 名(男児:14 名、女児:10 名)、4 歳児 21 名(男児:7 名、女児:14 名)、3 歳児 24 名(男児:13 名、女児:11 名)と A 保育園の女性保育士 9 名、そして K 大学の学生 5 名(男性:3 名、女性 2 名)及び K 大学大学院の男子大学院生 3 名である。

2) データ収集

2013 年 11 月の平日、子どもらは A 保育園のホールにおいてじゃれつき遊びを行った。ホールには、エバーマットを敷きそこに子どもが走り込んでジャンプをする等して遊ぶスペース、バスタオルを用意しそこに子どもを乗せて大人が引っ張ったり、子ども同士で引っ張り合ったりして遊ぶスペース、そしてスポンジマットを敷き、その上で大人の背中に飛び重なったり、大人が子どもを抱えてグルグル回す等の遊びが行われるスペースの 3 つが用意された。女性保育士、K 大学の学生及び K 大学大学院の大学院生、そして研究者は、子どもに交じってじゃれつき遊びに参加した。(※回収資料の写真参照)

11 月 1 日～22 日は、9:30～11:00 に学年毎に分かれ各学年 30 分ずつじゃれつき遊びを実施した。その際、じゃれつき遊びを行う学年の順番は特に定められておらず、保育士の間でランダムに決定された。11 月 25 日～29 日では、保育園の運営上の理由から、じゃれつき遊びの時間帯を 8:30～9:30 に移行した。そこでは、20 分のじゃれつき遊びが 3 回実施され、子どもは登園した順番にそのいずれかのじゃれつき遊びに参加をし、学年をまたいで遊ぶこととした。

その後、担当保育士 6 名に対し学年毎に半構造化インタビューを実施し、データを収集した。また、じゃれつき遊びで観察された子どもや大人の行動も資料とした。

5. 分析焦点者の設定

担当保育士らは、じゃれつき遊びを行う以前の子どもの実態を知り、じゃれつき遊び実施後の子どもの変化についても園での生活全体を通して観察することができる。また、じゃれつき遊びの特徴についても、他の遊びや他の日常生活の活動との比較を通して観察することが可能である。じゃ

れつき遊びを通した子どもの変容やじゃれつき遊びの特徴について豊富な情報が得られることが期待できるため、じゃれつき遊びを行った子どもの担当保育士を分析焦点者として設定した。

6. インタビューガイド

- ・これまでの子どもの実態
- ・じゃれつき遊びの特徴(他の遊びや他の活動との違い)
- ・じゃれつき遊びに対する子どもの反応
- ・じゃれつき遊び後に感じた子どもの変化

7. 分析ワークシートの例

以下、[驚くほどの日常生活での変容]という概念を例に、具体的な概念生成のプロセスを示す(※回収資料)。

テキスト・データにおいて、保育士がじゃれつき遊びでの経験によって生じたと考えた驚くほどの日常生活での子どもの変容を、バリエーションとし、立ち上げた分析ワークシートに記入した。そしてその概念を[驚くほどの日常生活での変容]、定義を[じゃれつき遊びでの経験が、日常生活での驚くほどの変容につながっていくこと]と定め、そこから類似のバリエーションを収集していった。その過程において「そうした効果が見られない子どもはいないのだろうか」といった対局例や「じゃれつき遊びの何がこうしたことに影響しているのだろうか」といった気づきを理論的メモに記述し、[変わらない子ども]や[通常では生じない身体の動きや関わり]等の概念を作成していった。

また十分な数のバリエーションが得られなかった概念については不成立とした。

8. カテゴリー生成:概念の比較をどのように進めたかを具体例をあげて説明する

以下、カテゴリーの生成方法について【じゃれつき遊びの特質】といったカテゴリーを例に[無条件の自由さ]と[通常では生じない身体の動きや関わり]の概念の関係から説明をする。

[無条件の自由さ]の概念に含めた具体例として次のようなものがある。

* 体育指導とか私たちがこう提供するものって言うのは、これがあってこうしてこうするっていうやっぱ規制の中での(活動)っていうのと、やっぱ自由に体を使って遊べるその差はかなり大きいかなって思います。だから、(子どもが)自分のできることをしますし、「これ(じゃれつき遊び)をやりたい」って気持ちがあるのかなって思います。(T 先生、1頁)

体育指導をはじめとして子どもたちの生活では、大人の指示によって動いたり、決められた型やルールに従って行動したりすることが少なくない。

例えば、馬跳びであっても、子どもは走って馬を飛び越えるといった運動の型の中で遊ぶことになる。またそこでは大人の指示や、苦手意識を持ちながら身体を動かすといった状況がしばしば生じるようになる。しかしじゃれつき遊びでは、こうした要素がほとんどないため、子どもは主体的、開

放的に身体を使って遊ぶようになる。

この何の制約もない[無条件の自由さ]が子どもの変容の第一のきっかけであると考え、そしてそのことから[通常では生じない身体の動きや関わり]が生じるのではないかと考えた。

この具体例は次のようなものである。

* で、あの少しずつ慣れてくると子どもたちも、子ども同士で遊べてるかなって思うんです。であの、(タオルに乗るのが)二人だと重いから二人で引っ張り合いっこになったりとか。ケンカなく工夫しているっていうのがよく見えるんですね。大人が声を掛けなくても「どうしよう。どうしようか。やりたい。」ってその遊びを発展させるための考えてやってるっていうのがよく見えるので。これはすごい、なんて言うのかな。工夫することで。物がマットとタオルとお相撲とかで限られている中での。(T 先生、1頁)

[無条件の自由さ]によって生じた子どもの主体性から、子ども同士で遊びを工夫していく関わりが起こっていったことが語られている。

また次のような具体例もあった。

* あの中でケンカってないですよ。踏まれてようがこんなになつてつぶされようが、楽しいから怒らないんだなって思いますね。(T 先生、9頁)

遊びを楽しみながら身体をぶつけ合うといった[通常では生じない身体の動きや関わり]が語られている。こうした[無条件の自由さ]や[通常では生じない身体の動きや関わり]が【じゃれつき遊びの特質】であると考えながらカテゴリーを生成していった。

9. 結果図

回収資料参照

10. ストーリーライン

保育士らはちょっとした身体接触でトラブルが生じることや何度も繰り返さなければ指示が伝わらないこと、保育士の周りをうろうろするだけで遊ばないといった[態度や行動の問題]を日常的に実感していた。そして、これらの問題は、外遊びの減少や生活リズムの乱れといった現代社会のあらゆる特徴が重なり合った結果として生じているのだと保育士らは考えていた。

じゃれつき遊びを開始すると、その直後から、子どもたちの集中力や意欲、あるいは社会性といった面での変容を保育士は驚くほど実感していった。そしてそうした変容が起こるのは、現代の子どもの生活で失われている要素が、じゃれつき遊びには含まれているためであるからだと保育士は認識していく。

大人の指示や規制、型等がないじゃれつき遊びの〔無条件の自由さ〕によって、子どもたちは動きたいという欲求を開放するようにダイナミックに身体を動かしたり、大声張り上げたり、または身体同士をぶつけ合ったりして〔通常では生じない身体の動きや関わり〕を起こしていった。またそこでは、大学生等の従来接する機会のなかった大人によって遊びに誘われたり、抱きかかえられたりすることで、自分を受け止めてもらえる喜びや子ども同士では味わえないスリルを感じることができ、さらにじゃれつき遊びの面白さや〔通常では生じない身体の動きや関わり〕が増加していったのである。そしてその結果、子どもの中で安定した状態がつくられていき、落ち着いた生活や他者との積極的な関わり、意欲的な生活態度といった〔日常生活での態度や行動の変容〕が起こっていったのである。

11. 理論的メモ・ノートをどのようにつけたか、また、いつ、どのような着想、解釈的アイデアを得たか。現象特性をどのように考えたか。

理論的メモは初めから付けて行きました。その中でじゃれつき遊びの自由さやそこでの独特な動きや関わり、大人の存在といったことが、子どもの態度や行動の変容に作用していることに気付いていきました。

しかし、その後 SV の先生から、それでは単なる整理に留まっているため、その中での相互作用や現象特性についてより深く検討するようアドバイスを頂きました。そこで再度、保育士の先生方へインタビューを行い、〔無条件の自由さ〕といったじゃれつき遊びの特質は、現代の子どもたちの生活で失われている要素であるため、じゃれつき遊びは子どもの変容を促していくのだと理解していくことができました。そしてそのことが主たる現象特性であると現在は理解しています。

ただ、多くの保育士の先生方が、自由遊びの中で子どもたちが自ら遊びを選択し、それに没頭していったことを、最も印象的な変容として挙げていたことも現象特性ではないかと考えています。

杉原(2014)は、自己決定的に遊びを選択し行動することは、遊びの教育的意義につながるものだと指摘しています。なぜなら、それは自分らしさや個性といった個人の潜在的な可能性を伸ばそうとする有能さの向上に繋がっていくものだからです。またこうした、じゃれつき遊びのような名前の付く遊び以前の遊びから、ルールや道具、型のある遊びへと移行していくプロセスは、「パイディア」から「ルドゥス」への移行として古くから指摘されていました(カイヨワ, 1990)。これは体育・スポーツの理想的な在り方とし考えられてきたものであり、私には今回のプロセスが、こうした理論とも重なって見えます。

12. 分析を振り返って、M-GTA に関して理解できた点、よく理解できない点、疑問点等

理解できた点(まだ全て何となくではあるが)

- ・M-GTA の分析の基本的な考え方や手順
- ・現象特性の導き方

難しさを感じる点

- ・概念と定義の設定の仕方

参考文献

- 阿部茂明・野井真吾・中島綾子・下里彩香・鹿野晶子・七戸藍・正木健雄(2011)子どもの“からだのおかし”に関する保育・教育現場の実感:「子どものからだの調査 2010」の結果を基に。日本体育大学紀要, 41(1): 10-13。
- 郷間英世・郷間安美子・川越奈津子(2007)保育園に在籍している診断のついでに障害児および診断はついていないが保育上困難を有する「気になる子ども」についての調査研究。発達・療育研究, 23: 19-29。
- カミイ, C.: 尾崎恭子訳(2008)第 I 部理論編。ピアジェの構成論と幼児教育 I 物と関わる遊びをとおして。カミイ / 加藤泰彦 編著。岡山, 大学教育出版: 岡山, pp.1-36。
- 木村順(2010)これでわかる「気になる子」の育て方。成美堂出版: 東京。
- 国立社会保障・人口問題研究所(2012)日本の将来推計人口。
<http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/newest04/sh2401simm.html>, (参照日 2014 年 10 月 21 日)
- Gottfredson, L. S. (1998) The General Intelligence Factor. Scientific American Presents, 9(4): 24-30。
- 井上高光・野尻ヒデ(2011)家でトライしよう! 「じゃれつき遊び」。正木健雄・井上高光・野尻ヒデ, 3~6 歳 キレない子ども 集中力のある子どもに育つ 脳をきたえる「じゃれつき遊び」。小学館: 東京, pp.36-88。
- 久保正秋(2007)身体教育のメディアとしての「遊び」再考。体育哲学研究, 37: 11-17。
- 成田奈緒子・原田ゆかり・樋口大樹・田副真美・成田正明(2011)じゃれつき遊びによる前頭葉抑制機能の変化。文教大学教育学部紀要, 45: 81-89。
- 西村清和(1989)遊びの現象学。勁草書房: 東京。
- 野井真吾(2003)子どもの輝く目を求めた実験的とりくみ: “教育生理学”的な分析から。教育, 693: 29-36。
- 野井真吾(2007)からだの“おかしさ”を科学する。かもがわ出版: 京都。
- 西條修光・寺沢宏次・正木健雄(1984)幼児における大脳活動の発達—高次神経活動の型から—。日本体育大学紀要, 14(1): 25-30。
- 鹿野晶子・野田寿美子・野井真吾(2012)朝の身体活動プログラムを実施している S 幼稚園児の高次神経活動の特徴: F 幼稚園児との比較から。幼少児健康教育研究 18(1): 28-36。
- 杉原隆(2014)幼児期の運動発達と指導の基本。幼児期における運動発達と運動遊びの指導, 杉原隆・河邊貴子, ミネルヴァ書房。
- ヴィゴツキー, L.: 柴田義松・森岡修一訳(1976)児童心理学講義。明治図書: 東京。
- カイヨワ, R.: 多田道太郎・塚崎幹夫訳(1990)遊びと人間。講談社: 東京。

【会場からのコメント概要】

①じゃれつき遊びを研究するきっかけ

全ての子どもがスポーツを行わなければならない理由は見当たらない。しかし、じゃれつき遊びは、特に子どもの人間形成と関係していて、全ての子どもに必要な運動であると捉えることができる。じゃれつき遊びの意義や指導方法を明らかにしていくことで、運動の意義が広がり、運動の実施率も向上させられるのではないかと考えている。

②M-GTA を研究方法として選定した理由

じゃれつき遊びの何が作用して子どもの変容が生じていくのかといったプロセスに興味があったため、M-GTA を先行研究として選択した。

③研究を進めていてプロセス性は出てきているか

保育園の先生から、じゃれつき遊び後の子どもの変容の状況やじゃれつき遊びの何が影響をして子どもの変容が生じていくのかが語られている。

④子どもは日常的にじゃれついているが、じゃれつき遊びをあえて行うのはなぜか

現代の子どもが日常的に行っているじゃれつく行動では、態度や行動の変容を十分に起こすことができないのだと考えている。そこであえてじゃれつき遊びを行い、態度や行動の変容が起きるような工夫をしていく必要があると感じている。

⑤保育士の語りから発見したことはあったか

現代の子どもから失われている要素が、子どもの態度や行動の問題を生じさせていて、じゃれつき遊びはその失われている要素を補う働きがあるため、子どもの態度や行動の変容が起きるのだと保育士の語りから理解できるようになった。

⑥誰とじゃれつき遊びを行うかで効果に違いがあるのではないか

今回の研究では、保育士の視点からは子どもの変容があったことが確認されており、特に問題はなかったと回答をした。しかし、発表後、保育士の語りの中に兄弟同士の関係が豊かになったという具体例があったことや、高齢者が地域の子どものと関わることでそれが長寿につながるという先行研究があったことを思い出した。そのため関わる大人の違いによって相互作用の在り方を検討する必要性に気付いた。

⑦行動主義と構成主義とどちらに興味があるのか。子どもの関係性の変化に興味があるのか、それとも子どもの中でどんな変化が起こっているのかに興味があるのか。ストーリーラインの前半では保育士の実感の変容が示されているものの、後半では子どもの変容が述べられている。指導方法に興味があるのか、子どもの発達に興味があるのか。

発表の際は上手く答えることができなかったが、改めて検討してみた。研究の動機は、指導の在り方を提案することである。ただ、じゃれつき遊びによってどのように子どもが変容するかを明らかにすることで、何に重視してじゃれつき遊びを実践すればよいかを明らかにしたいと考えている。そのため子どもの関係性を明らかにし、そこから指導方法を提案したいと思っている。

⑧知りたいことは、じゃれつき遊びを通じてどのように子どもが変容するかということである。バリエーションをみると「子どもが自ら動くようになる」といった違う概念が出てくるように感じる。具体的なデータがあるのでもっと活かした方がよい。

この質問にも上手く回答できなかったが振り返ってみると、これは相互作用が描けていないという指摘なのだと理解できた。

⑨この研究は保育士の視点から概念を作っていくのに、子どもの心理がどうなっているのかの記述もあって、関心が二重になっている。分析焦点者の設定を分析テーマとの兼ね合いで確認する必要がある。仮に統一するとすれば、分析テーマを「保育士から見たじゃれつき遊びにおける子どもの態度や行動の変容プロセス」、分析焦点者は「じゃれつき遊びを行った子どもの担当保育

士」とすればすっきり行くかもしれないが、それが本当に研究の関心なのかを考える必要がある。

分析焦点者と分析テーマのご指摘を複数の先生から頂いた。保育士の視点から子どもの変容を明らかにするという視点をずらさないように、再度分析作業をしたいと思っている。

【感想】

今回初めて M-GTA での研究に取り組み、発表をさせて頂きました。自分なりに論文の執筆まで行ってみたのですが、読み返してみて、どうも上手く現状が描けていない、読んでも面白さがないという印象を持っていました。SV をして頂いた小倉先生からも言葉を整理しただけで、子どもの様子や保育士が感じていることが伝わりづらくなっていると指摘を受けました。ではどのようにすればいいのかははっきりしないまま発表当日を迎えてしまうこととなりました。

発表当日も小倉先生から再びアドバイスを受け、またフロアの先生方からもご意見を頂いていく中で、ようやくそれが相互作用を描けていないことに原因があるのだと理解できました。大変基本的なことではありますが、私にとっては大きな収穫でした。もちろんまだ M-GTA を理解しきれていないわけではありませんが、今回頂いたご指導をもとに、必ず論文が掲載されるよう今後も努力していきたいと思っております。

また、今回の経験は私にとって研究者としての姿勢を学ばせて頂く機会にもなりました。SV の小倉先生には、私が修正をする毎に、大変細かく熱心に指摘をして頂きました。そのことで私は M-GTA の考え方をさらに深められ、同時にそうした小倉先生の姿勢を勉強することもできました。フロアの先生方からも大変的確で有意義なコメントを頂きました。伺った直後はその意味がしっかりと理解できずにいましたが、改めてレコーダーで聞き直すと、全ての質問が大変深く建設的で、意味のある内容であったことに気付きました。発表後も声を掛けて下さった先生方や回収資料にコメントを書いて下さった先生方もおり、大変励まされた気持ちになりとても感激致しました。

これからも M-GTA を勉強し、研究を行っていきたいと思っております。今回はこのような機会を頂き、心より感謝申し上げます。

【SVコメント】

小倉 啓子（ヤマザキ学園大学）

1. 研究背景と先行研究

M-GTA 研究会では、スポーツ領域の発表ははじめてのことであり、千葉さんのご専攻がスポーツ哲学と伺って、大変興味深く感じた。千葉さんは遊びも含めて広くスポーツというものを捉え、人間にとってのスポーツの意味や働きを研究しておられるとのことである。また、「じゃれつき遊び」という名の遊びがあること、千葉さんだけでなく研究会参加者のなかにも「じゃれつき遊び」を実践されていることも始めて知った。参加者の皆さんにとっても耳新しいことだったと思う。

発表では、「じゃれつき遊び」が導入され、意義ある活動として認識されている背景として、子どもの体力や忍耐力、集中力の低下、子どもが生活している社会の状況が示された。また、「じゃれつき遊び」をした後の子どもの行動変化を保母さん達がさまざまな場面で実感していることや、「じゃれつき遊び」と他の遊びとでは体験するが違うことなどについて、日本の先行研究をレビューし、ヴィゴツキーやピアジェ、カミイなどによる発達心理学の知見が検討された。さらに、「じゃれつき遊び」の実践とビデオ撮影、観察、保母さんへのインタビューなど多様なデータが収集されていることもわかった。このような点からみて、本研究で「じゃれつき遊び」の特性と子どもの行動の変化の関係を捉えることは、「じゃれつき遊び」のより効果的な用い方を提案し、子どもの発達に寄与するという社会的意義な意義も確認出来る。

2. M-GTA に適した研究であるかどうか

「じゃれつき遊び」は心身を思い切り使った相互交流そのものなので、どのような相互作用が誰との間で展開されるのかを捉えることが出来る。子どもの行動変化が認められているのでプロセス性もある。従って、千葉さんの研究は M-GTA に適していると考えられる。ただ、意識する必要があるのは、分析する現象に相互交流やプロセスがあることを確認して安心するのではなく、どのような相互作用によってそのプロセスが展開するのかを明らかにすることが研究目的だということである。発表時点では、「じゃれつき遊び」特有の相互作用は何か、行動変容においてどのような相互作用の変化があったのかという視点が足りないように思われた。

そのために、分析が平板になった可能性があると思う。

3. 分析焦点者の設定

インタビュー対象者であり、実践の協働者である担当保育士を分析焦点者にしている。「じゃれつき遊び」における子どもとの相互作用、遊びの後の行動変化を保母はどのように意味付けしているのか、認識しているのかを捉えることが目的であるので、分析焦点者を保母さんとしたのは適切であろう。

4. ワークシート・分析について

発表では、概念[日常生活での態度や行動の変容]を提示された。子どもの多様な行動変化をまとめて、この概念を生成されたのであろう。しかし、この概念からは子どもと他者、子どもと場面との間にどのような質の相互作用があるのか、何がどう変わったのか、動きもイメージも浮かんでこない。保母さんは「じゃれつき遊び」を通した子どもの変化に驚き、喜び、感心しているのではないだろうか。保母さんは子どもの行動をどのように受け取って意味づけ、「じゃれつき遊び」の効果を素晴らしいと思ったのだろうか。[日常生活での態度や行動の変容]というひとくくりで整理するのではなく、保母さんが子どもとのやり取りで経験している「じゃれつき遊び」ならではの行動変化、こういう子どもがこう変わった、という驚きや喜びを掬い取って解釈する必要があるだろう。

データを見ると、保母さんの語りには具体的なエピソードが多く、詳しく場面を描写している。現時点では、折角のデータを生かし切れていないと思う。データを決まり切った言葉で整理しまとめるのではなく、分析テーマと焦点者に照らして解釈し、保母さんの体験を生き生きと、読者の感性を啓発するように言語化していただきたい。M-GTA による優れた論文を読まれると参考になると思う。

【第3報告】

中原 登世子(早稲田大学大学院人間科学研究科)

Toyoko NAKAHARA : Waseda University Graduate School of Human Sciences

宗教者が死の臨床現場に接近し、医療と関わりを持つに至る過程

～宗教者は実存的・根源的な苦悩に応え得るか～

The Process of religionists approaching to and entering into clinics on death and dying - Potential for spiritual care by religionist in clinics

研究背景

本研究は、発表者の博士論文研究「ビハークでつくられる死～仏教的ケアと看取りの共同体の形成過程に関する研究～」(以下、ビハーク研究という)論文の一部をなすものである。

＜ビハーク研究の背景と目的＞

三人に1人ががんに罹患すると言われるわが国では、高齢がん患者が増加の一途を辿ることが予測される。年々増大する医療費を抑制するため、平成18年以降、効率的で質の高い医療を提供すべく病院の“機能分化と連携を”図る医療政策が推進されてきた。

平成24年4月には、緩和ケア病棟の入院期間の短縮が評価される診療報酬改定が実施された。緩和ケア病棟は“another ICU”と呼ばれ、迅速な症状緩和や、自宅や他の療養の場で最期を迎えることが困難な場合に、臨死期の数日間、亡くなるために入院する患者さんの看取りをする“看取り救急”(急性期緩和)の機能が期待されている。

国の政策により、患者は急性期、回復期、慢性期、終末期といった局面ごとに病院・施設を移動し、最終的には在宅での看取りを増やすことが国の目標とされている。看取るための病床が不足することと、終末期の医療費を抑制する必要があるからである。しかし、地域に、退院後の連携先となる医療・福祉資源がない場合、緩和ケア病棟でも、ある程度長期に患者を看る必要があり、“ホスピス機能”を維持することになる。

わが国の臨終場面での看取りの作法として行われた“臨終行儀”の論拠を最初に示した永観二年(984)の源信の「往生要集」によれば、病いが重くなった念仏行者が往生のために移された「無常院」では、看病人は病人の世話だけでなく共に経文を読んだり念仏を唱えたりして宗教的配慮をしていたことが窺われる。藤腹は、この「無常院」が日本的ホスピスの原型といえる、と説明している⁴。

⁴ 臨終行儀 日本のターミナルケアの原点、第四章「臨終行儀」に学ぶ の第一節(藤腹明子執筆)に、看病人が病者のまわりで香を焚き、花を撒いて病人の身边を飾り、病者が嘔吐すれば吐物を除去し、下の世話や身体を清めるなどの世話が義務づけられ、宗教者の立場から病者の不安を軽くするために読経するなどの宗教的配慮が重視されていたこと、単なる医療施設ではなく、死の向こう側への通過点、宗教的癒やしと救いのある聖なる場であつたと説明されている。

現在、多くの患者が死亡するわが国の一般病院では、一部のホスピスやビハラーを除き、宗教的配慮は重視されていない。「死んだらどうなるのか」という患者の問いに、医療者は直接は答えず、その問いが発せられた背景を把握して寄り添い、可能なかぎり苦痛を緩和するよう努めているように見える。限りある命の短さを知らされた患者、また、病気に限らず、事故や災害、自死や犯罪被害など不条理な死に直面したとき、人は実存的・根源的な苦悩に苛まれる。東日本大震災後には、被災地で遺族に悲嘆のケアを行う宗教者が現れた。2012年4月には、東北大学大学院に宗派を超え、布教ではなく心のケアができる宗教者を生み出すことを目的とした実践宗教学寄付講座が設立されている。

ビハラーとはサンスクリット語の vihara を音訳したもので、「精舎・僧院」「身心の安らぎ・くつろぎ」「休息の場所」を意味する。仏教の教えは生老病死の苦悩を課題とし、身心の安らぎをもたらすもので、医療と密接な関わりを持っている。

ビハラー研究では、仏教を背景としたターミナルケア施設(A 病院緩和ケア病棟。病棟の中心に仏像のある仏堂が設置され僧侶が常勤している)の患者が入院後、病棟で看取られるまでの過程を「病みの軌跡」⁵をたどりながら検討し、それぞれの局面において患者が他者とのような関係を築きながら最期まで生きぬくのかを明らかにしていく質的記述的研究とする。ビハラーは、患者・家族、医師・看護師等のケア従事者、僧侶及びボランティアなどのケアラーから構成されている。検討によって、ビハラーの理念のひとつである「仏教を基礎とした共同体」がどのように形成されているのかを探索する。

日本ホスピス緩和ケア協会に登録された、仏教を背景としたターミナルケア施設は、現在、3施設しかなく、このビハラー研究の主題と同様の先行研究論文は見当たらない。発表者は、研究の事前準備として、協力施設において2013年4月よりボランティアとして参与観察を継続し、2014年7月に早稲田大学 人を対象とする研究に関する倫理委員会の承認を得て、研究を開始した。

<博士論文の章立て(予定)>

- 第1章 ビハラーの提唱とこれまでの実践(わが国における仏教と医療の関わり、なぜ仏教的ケアに注目するのか等。海外事情調査・先行研究のレビューを含む)。民間信仰。
- 第2章 仏教的ケアと看取りの共同体を形成するケア従事者とケアラー(医療者、僧侶、ボランティア)
- 第3章 ビハラー患者の病歴、入院要否診断獲得過程、入院後の疾患コースと illness work(症例検討)
- 第4章 患者と家族の biographical work(“ビハラーに家族を送る”ということ(家族)、“ビハラーの患者になる”ということ(患者))
- 第5章 “ビハラー患者の遺族になる”ということ(遺族)(trajectory framework の振り返り、死生の

⁵ コービンとストラウスによれば、「軌跡」とは、病気や慢性状況の行路であり、行路を方向づけるためには、患者・家族・保健医療専門家が共に努力する必要がある、とされている。軌跡の管理には、患者を取り巻く人々の相互作用や相互関係が影響を与える。

学び獲得過程、遺族同士の絆の形成、ケアの継承性)
終章 看取りの共同体で生き抜くということ

備考:

＜病みの軌跡について＞

コービンとストラウスの軌跡理論を参考にする。局面は、「前軌跡期」、「軌跡発現期」、「クライシス期」、「急性期」、「安定期」、「不安定期」、「下降期」、「臨死期」に区分され、それぞれ定義されている。軌跡の枠組みは「病気の慢性的状態は長い時間をかけて多様に変化していく一つの行路を示す」という考えに基づいている。この病みの行路は方向を定めたり管理することが可能であり、適切な管理をすれば随伴する症状をコントロールすることもできるとされている。例えば、「化学療法の副作用で生活の質に与える悪影響が多い場合、がんを治療せずに病いとともに生きる選択がなされるのは、疼痛管理により身体的安寧を得ることで生活の質が向上し、病みの行路も変化する」と言う説明は、十分に妥当であると考えられる。

長期に安定している患者も、紹介元の病院で手術や化学療法などの治療を受けて急性期を脱したが、再発してなすすべがないとしてビハークに送られて来ていることがある。ビハークに入院する以前からの軌跡の局面は上昇や下降を繰り返しており、入院後も局面の移行がある。患者と家族は、ビハークでの入院生活中、現在、自分たちがどの局面にあるのかをなんとなく理解しているようである。「軌跡の予想」、すなわち、病みの行路の見通しの見当が付き、医師が家族にインフォームド・コンセントを行って、現れてくる行路の管理(方向付け)をすると、それによって家族は局面が移行したことをはっきり認識し、患者とのかかわり方を変えることがある。

＜看取りのための共同体の形成について＞

医療者は、入院から看取るまでの「軌跡の全体計画」⁶を描いて管理しているようにみえる。管理に影響する条件は複雑である。人的資源や社会的支援などの資源、医学的状态とその管理に伴う過去の経験、ケアの環境、ライフスタイルと信念、軌跡の管理に携わっている者の間の相互作用と相互関係など多様で、これらの条件の組み合わせが、管理のプロセスを促進したり遅らせたりする。ビハーク研究では、調査対象者のそれぞれの局面におけるこれらの条件、特にケアの環境(仏教的資源が用いられる環境)と、軌跡の管理に携わっている者の間の相互作用と相互関係に注目する。患者と患者を取り巻く他者との関係性は、患者の行為、ことば、表情、身体所作、他者との会話、共同作業の観察記録に基づき詳細に検討する。その際、心理学の社会構成主義、社会学の相互行為論を参考とする。

＜本日の研究テーマへの発表者の関心と研究目的＞

ビハーク研究の中で、医療に関わる仏教者に、半構造化面談を行っているところである。現状では、6名の僧侶に対して平均45分のインタビューを実施し、逐語録化し、分析を開始した段階である。

⁶ 「軌跡の全体計画」とは、病みの全体的な行路を方向づけること、今ある症状をコントロールすること、障害に対応することを目的として立案される計画である。

患者は、病院の各職種の役割を敏感に察知し、身体的苦痛については医師に、薬や喀痰の吸引や人工肛門の処置などは看護師に、着替えや整容や環境整備は介護士にといった使い分けをしているようである。ビハークに不可欠な存在である僧侶に対しては、お経を読みたい、仏堂で寝たい、仏陀の漫画を読みたい等を含む医療・介護以外の諸事について持ちかけているように見える。

患者の実存的・根源的な苦悩に対するケア(スピリチュアルケアと言われることが多い)を担当するのはどの職種、と決めることはできず、また、特定の職種だけがそれをできるとも限らない。しかし死後の世界に関する問い応えやすいのは僧侶であると考えた。

発表者は、生死に関わる職業専門家である僧侶には、患者の死への恐怖や不安を、また、遺族の悲嘆を和らげることができるのではないかと考えている。しかし、日本に最初の施設ができて 22 年経過した現在も、ビハークが未だ 3 施設しかない状況であり、僧侶が臨床現場に入るには高い障壁があるのではないかと考えられる。現在、ビハーク活動をしている彼らはどのようにして臨床現場に接近し医療と関わりを持つようになったのか。患者、家族、医療者とどのような相互行為があり、どんなことを体験しているのかを知りたいと考え、それを明らかにすることを研究目的とする。

1. M-GTA に適した研究であるか

① 社会的相互作用

僧侶と、患者・家屋・医療者らとの社会的相互作用の中で、僧侶がとる行動とその変化をとらえようとしている。

② プロセス的性格

とらえようとしている現象がプロセス的な正確をもっている。

- ・ 僧侶が看取りの臨床現場に入り、他者との関係性の中で変化し、他者から居場所を与えられて臨床現場に定着させていく過程

③ 理論を生成し、実践的活用を支援する

研究によって得られたモデルによって、僧侶がさまざまな困難を経験しながら、何らかのかたちで「他者から活用される仏教的資源」になろうと変化していくことを予測し、説明できる理論を生成する。僧侶のビハーク活動の実践に活かすことができる。

④ 当初は、ビハーク研究全体としては、非コード化・記述重視のエスノグラフィとする予定であったが、患者・家族の個人情報保護の観点から協力施設における制約が生じた。コード化・理論化重視の M-GTA を分析手法とする場合、理論を生成できるだけの語りのデータが得られない可能性もある。収集できたデータの量と質を検討して決定していくが、僧侶がどのように臨床現場に入ってきたかの経緯や動機の違いは、ビハークにおける他者との関わりに影響を及ぼすと考えられ、本研究で得られた理論は、博士課程研究の重要な要素となると考えている。

2. 研究テーマ

- ・ 宗教者が死の臨床現場に接近し、医療と関わりを持ち、臨床現場において患者、家族、医療者と安定したやりとりができるようになり、患者の実存的・根源的な苦悩に応えたり、遺族の悲嘆のケアができるようになるためには、どうアプローチすべきか検討する。

3. 分析テーマへの絞り込み

- ・ 被調査者が全員、僧侶であったので「宗教者」ではなく「僧侶」に修正した。
- ・ 当初は、「葬式仏教に甘んじて寺社会に留まっておけばよい」とは思わない僧侶は、なぜ、どのようにして、臨床現場に参入してきたか。そしてどのような壁にぶつかり、乗り越えて、臨床現場で自分の居場所と出番を持てるようになったのか(なりつつあるのか)。実存的・根源的な苦悩に応えられるようになるのか」を分析テーマとしていたが、絞り込めておらず、データを読み込んで分析を進める過程で、以下の三つに分けられるのではないかと考えた。

分析テーマ①「僧侶が自分を寺社会の外に出していくプロセスの研究」

寺社会の中にいる僧侶が、寺の外の社会と関わりを持つようになる過程。

相互行為の相手は、まだ臨床現場にいる人びとではなく、一般社会の人びとである。

分析テーマ②「僧侶が自分を死の臨床現場につなげていくプロセスの研究」

死の臨床現場(ターミナルケア)に入った僧侶が患者や医療者との関わりを深め、自分を臨床現場に定着させていく過程。

相互行為の相手は、患者・家族、医療者など看取りの現場で共同体を形成する人びとである。

分析テーマ③「僧侶が自分を病院以外の生死の場につなげていくプロセスの研究」

病院にいる僧侶が、病院以外の生死(しょうじ)の現場に関わっていかうとする過程。

検討を続けた結果、分析テーマ①と分析テーマ②では、僧侶のいる場の環境に違いはあるものの、分析テーマ①における、寺社会の中と外とのつなぎ役が看護師である例が複数あり、①と②は分割しないほうが良いと考えた。臨床現場への入り方によって、入った後の他者との関わりに影響を及ぼしているか分析を深めていく。結論として、今回は、

「僧侶が自分を死の臨床現場につなげていくプロセスの研究」とした。

分析始点:僧侶が現在の寺社会に閉塞感を感じている状態

分析終点:僧侶が自分をビハーラにおける仏教的資源のひとつであると感じている状態

なお、直前にインタビューした6人目の被調査者の語りに、ビハーラのあり様がターミナルケアから緩和ケアに変わり、仏教的資源としての僧侶が活かされる余地が小さくなりつつある様相が読み取れた。分析テーマ③については、別テーマとして設定し、次の研究としたい。

4. インタビューガイド

- 1) 医療にかかわりたいと考えるようになった経緯を教えてください。
- 2) 実際に臨床の場に入ることになったきっかけは何でしたか。
- 3) はじめて臨床の場に入り、患者さん、家族、医療職の皆さんと関わり、安定したやりとりができるまでの間に、どのようなできごとがありましたか。
- 4) 臨床の場における、仏教者の役割をどう考えていますか。
- 5) 今後、仏教者が医療に関わるとしたら、どんな場なら可能と考えていますか。

5. データの収集方法と範囲

- 1) 研究実施責任者(発表者)から協力施設の責任者(緩和ケア部長)に、研究協力者を紹介いただく。
- 2) 研究実施責任者が、研究協力者に「研究協力者の方への説明文書」で研究目的・方法を説明し同意を得て、「研究協力への同意書」に署名をいただく。
- 3) 面談は、協力施設の病棟内、或いは、研究協力者の希望するプライバシーの保てる静かな場所で行う。
- 4) インタビューガイドを用いて、1人1回、30分～60分程度の面談を行う。必要な場合は、複数回、面談を行う。状況に応じてグループインタビューとする場合もある。
- 5) 研究協力者の了解を得て、ICレコーダーを使用する。
- 6) 面談中、研究協力者が身体的・心理的疲労を訴えた場合には、面談を中断できること、及び、研究協力への同意は撤回できることを予め説明しておく。
- 7) データの範囲は
 - * 何らかの経緯で後に僧侶になった人ではなく、寺の子として生まれた僧侶(6名中5名)。出自の違いによって語りのデータの特性が異なり、均質なデータではなくなるため。1名の方はビハラの遺族であり、もともとビハラとの関係をもっていた。対極例として検討することで新たな視点が得られる可能性がある。
 - * 葬式仏教や檀家制度に危機感を感じている僧侶
臨床現場に入る動機の強さによって、入ったあとの関わり方に影響がでると考えたため。しかし寺社会に安住している僧侶が外にでる必要や誘因は殆どなく、データの範囲として設定する必要は結果としてはなかった。
 - * 被災地で又は日常の法務で、遺族の悲嘆のケアを行っている僧侶
この範囲設定は、分析テーマ③で分析をすすめる際に適用することとなる。

ID	年齢層	性別	出自	ビハラとの関わり、ビハラ活動経験年数	逐語録
1	30代後半	男性	寺に生まれる	常勤僧、5年	12,231字
2	30代後半	男性	寺に生まれる	ボランティア僧、1年、寺の法務あり。	6,937字
3	70代前半	男性	60代で得度	ビハラの遺族、ボランティア僧、13年	3,937字

4	30 代後半	男性	寺に生まれる	ボランティア僧、1 年、寺の法務あり。	8,478 字
5	30 代前半	男性	寺に生まれる	元常勤僧、2 年	18,138 字
6	60 代前半	男性	寺に生まれる	ボランティア僧、22 年、寺の法務あり。	18,239 字

(ID6 のデータは今回の分析に含まれず)

6. 分析焦点者の設定

- ・ ビハーク活動を行っている僧侶

7. 分析ワークシート(別紙・回収資料)

8. カテゴリー生成

現時点では、17 概念を作成した。概念を[]で、カテゴリーを【 】で表記する。

分析始点は、僧侶が現在の寺社会に閉塞感を感じている状態(時点)である。

[僧侶である自分の有意味感不足]、[現状打破の希求]を【寺の中での閉塞感】とした。閉塞感を感じているところに[看護師との接触]があり、または[準備と機会の因縁の出会い]があり、一步を踏み出そうとした自分のまわりの旧態依然とした[古い同業者への苛立ち]を感じながら【寺の外への第一歩】を踏み出していた。

[古い同業者への苛立ち]の語りは何度か繰り返されており、当初は分析テーマ③になる今後の展開の部分として概念を生成していたが、自分が踏み出す動機のひとつとなっていると解釈しここに移動した。

病院という建物に入るとき[法衣への冷たい視線]を浴びてうまくいかないのではないかと予感し、お坊さんが病院に来ることが[縁起でもなさという足かせ]になっていると感じ、【最初のハードル】とした。

現場に入り、[現場に入りきれない思い]をしつつ、何とか自分の立ち位置を決められるよう僧侶らしい[自分の仕事のねじ込み]をしたり、[空回り体験]をしたり、医療職からの[叱責と拒絶の体験]をすることを【うまくいかなさ体験】で括った。

その繰り返しの中で[うまくいかなさ体験の内省]をし、患者との[関わりによる自己の意味づけ]をして自分を叱責・拒絶する[医療者の理解の努力]をする過程は連続的な近接であると考えて【内省と方略】とした。

患者が自分に居場所を与えてくれて、それを受け取る[居場所の授受]、患者からの声かけ働きかけではかる[信頼関係のもの差し]を得られることが自分を医療者や臨床現場に【つないでくれる媒体】となっている、とまとめた。

これでいいんだ、という[自己承認]、患者から望まれる仏教的行為を通して患者と関わって、自分が仏教的資源である確認する[ビハーラ僧としての自己規定]を【臨床現場に定着】で括った。

分析終点は、僧侶が自分をビハーラにおける仏教的資源のひとつであると感じている状態である。

9. 結果図(別紙・回収資料)

現時点では別紙のとおり。まだ十分な検討ができていない。

10. ストーリーライン

現時点での結果図から考察すると、①自分から無理矢理に押しかけてうまくいかなかった経験と ②患者から居場所を与えられるという受け身経験を並行して体験しながら、自分をビハーラに定着させていっているようにみえるが、まだ十分な検討ができていない。

11. 理論的メモ・ノート

- ・ 逐語録を読みながら、ピンときた語り(ある程度の意味のまとまりのある数行)にマーキングをして概念名の案をメモし、それに類する他の方の語りの部分も○をつけた。
- ・ 逐語録にマーキングしながら定義と概念名の生成を試みて、逐語録にメモした。
- ・ ワークシート様式を作成して、メモしておいた最初にピンときたものと定義・概念名を記入し類似のものを記入していった。理論的メモ欄に、逐語録のメモを転記しながら、浮かんできた新しいアイデアをメモした。
- ・ 新しいバリエーションを追記する際に、その都度、この概念に含めていいかどうか考えながら、違うのでは、と考えたら別の概念に分けて新たな概念を生成し、その経過をメモした。

12. 分析を振り返って

- ・ 「わかっているつもり」と「わかっている」ことの違い、「わかっている」と「できる」ことの違いを痛感した。(現時点では、まだこの程度です)

<参考文献>

- ・ 藤腹明子(1993):臨終行儀 日本のターミナルケアの減点、第4章「臨終行儀」に学ぶ 第一節、北辰社
- ・ 田宮仁(2007):「ビハーラ」の提唱と展開、学文社
- ・ ピエール ウグ編集・黒江ゆり子他訳(1995):慢性疾患の病みの軌跡 コービンとストラウスによる看護モデル
- ・ 南裕子・木下康仁・野嶋佐由美訳(1987):慢性疾患を生きるケアとクオリティ・ライフの接点
- ・ 山崎浩司(2010):インフォーマルケア論と相互作用論の視座ー死と看取りの社会学の展望ー、社会学年報 No.39

<方法論及び研究例として参考にした文献>

- ・ 木下康仁(2003):グラウンデッドセオリアプローチの実践、質的研究への誘い、弘文堂

- ・ 木下康仁(2007):ライブ講義 M-GTA-実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて、弘文堂
- ・ 木下康仁(2009):質的研究と記述の厚み、弘文堂
- ・ 木下康仁(編著)(2005):分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ、弘文堂
- ・ 山崎浩司(2011):質的研究の技術 1 基本編、日本認知症ケア学会誌、10(1)、106-113
- ・ 山崎浩司(2012):質的研究の技術 2 分析編、日本認知症ケア学会誌、10(4)、490-496
- ・ 小倉啓子(2002):特別養護老人ホーム新入居者の生活適応の研究、老年社会科学、24(1)、61-70
- ・ 鷹田佳典(2012):小児がんを生きる 親が子どもの病いを生きる経験の軌跡、ゆみる出版

【研究会でいただいたコメントのまとめ】

(1) 博士論文の構想について(山崎先生との応答)

「ビハーラ」とは、端的にいうと仏教ホスピスである。仏教ホスピスは全国に三施設しかなく、偶然、研究フィールドを得た。今回の M-GTA を使った研究は、博士論文の第 2 章「仏教的ケアと看取りの共同体を形成するケア従事者とケアラー」に位置づけられる。他の部分で M-GTA を適用するのは、僧侶のほかにボランティアの方々(ケアラー)の語りのデータである。しかし、どのようなデータが得られるか、結果をみてから研究方法を決定する。理論生成に至るようなデータが得られない可能性もある。

(2) ビハーラにおける宗教者のケアに関して(フロアとの応答)

僧侶は、朝 8 時半と夕方 4 時にお勤めを行なう。常勤僧とボランティア僧が交代で担当し、お経を読み法話を行なう。患者さんが亡くなられると湯灌をされて、お帰りになる前にお別れ会を司る。患者さんや家族の求めに応じて訪室してお話を聴くなどしている。「仏教的ケア」とは、仏堂、仏像、僧侶、お経を読める環境、仏教に関する文献などの資源が用いられるケアと定義している。

(3) コービンとストラウスの病みの軌跡理論について(山崎先生との応答)

データを活かして理論生成していくことが中心となる M-GTA を適用するにあたり、既存の理論に影響されてしまう。例えば、自分のデータを解釈していく過程で無理矢理その理論に押し込んでいくといった危険性がある。そのような危険性は、それを自覚することで意識的に回避したい。また、大学の倫理審査の結果、インタビューで得られたデータのみに基づいて研究することとなった(診療記録等のデータを読み取り、既存の理論に沿って分析する方法は承認されなかった)。

(4) 分析テーマの設定(山崎先生との応答)

最初に設定していたテーマは数行の長い文章で、焦点がどこにあるのか不明確であった。スーパーバイザーの山崎先生との事前のやり取りの中で、分けるとしたらどう分けられるか、三つに分けたらそれで本当にいいのか、敢えて二つにしたら、ひとつでなければならないならどうするか、という問いかけを戴き、熟考の末、三つにわけたものを最終的に二つに分け直し、今回のテーマは上述

したものに設定した。

(5) 分析焦点者とデータの範囲の設定(フロア及び林先生との応答)

分析焦点者の僧侶の方々のイメージがわきにくい。データの範囲として設定した基準に合わない方もいるのではないか。ビハラー活動をしている僧侶はどれくらいいるのか、とのフロアから質問を戴いた。研究フィールドとしている病院には常勤僧のほかにはボランティア僧の方が交代で来られている。「仏教者ビハラーの会」の会員の僧侶は約 50 名である。ボランティア僧は、寺の法務を持っている。そのほかにはビハラーで家族を看取った経験から後に僧侶になった方もある。多くは寺に生まれた僧侶である。常勤僧は病院に採用されている方で、お寺の住職を継がない方である。「死の臨床現場」という言葉がぴんとこない。在宅で亡くなるまで近くで祈っていたりということが昔はあったはずで、それは僧侶として当たり前の行為なのではないか。病院という施設で行なうことは特殊で新しいやりかたなのかもしれないが、わざわざ「死の臨床現場」として取り上げる意味を明確にしないと分析テーマがぼけてしまう、とのコメントを戴いた。「仏教を背景としたターミナル施設(ビハラー)」を「死の臨床現場」と言い換えたのがわかりにくくしていた。特殊性が大事なので、そこを明確にするとよい、という助言であった。

(6) 教会系の病院のチャプレンの研究について(小倉先生の応答)

チャプレンの方は辛くて辞められる方が結構おられるとのことである。僧侶の場合は、今回の分析対象者の場合、辛くなっている方がいるようには見えない。チャプレンが行なうスピリチュアルケアは、自分のほうから患者さんに寄り添っていつていると考えられるが、ビハラー僧は自分が仏教的資源のひとつとして、そこに待っていて、患者さんや家族のほうから接近してきたら応える、という関わり方である。布教にならないようにしているとも考えられる。キリスト教のチャプレンとビハラー僧の患者さん・家族との関わり方の違いについても検討したい。

【発表の感想】

山崎先生の事前の SV では、コービンとストラウスの軌跡理論、それ以前にグレーザーとストラウスの軌跡理論があり、そのような既存の理論が、データに根ざした分析を展開することを難しくする可能性があり、どのような工夫をしてその可能性を回避するのか、という問いかけをいただきました。

グレーザーとストラウスの「死のアウェアネス理論」は質的研究の参考書で学んでいましたが、改めて木下先生の訳書を読み、山崎先生の指摘された「既存の理論に影響される危険性」の意味が理解できました。これまでデータを読み進めていく過程で、「この部分はこの理論に当てはまるのではないか」と考えていた面がありましたが、「死のアウェアネス理論と看護」の中にもそのような理論を多く見出しました。得られたデータを深く解釈するには、「これは便利に解釈できる」という理論を、一旦、横に置くべきであると感じました。

また、「ビハラー研究全体ではエスノグラフィとしたい」のであれば、M-GTA による理論重視の研究結果の位置づけはどうなるのか、という山崎先生の問いには、「どうしようか……」と考えあぐねてい

たところでしたので、検討して決めなければならないと認識しました。博士課程研究の研究テーマと研究フィールドの決定に 1 年半、大学の倫理審査に半年以上の期間を要し、当初、書きたいと思っていたエスノグラフィは、諸々の事由から困難になってきたこともありました。

今回の僧侶の方々の語りのデータは、理論を生成することが可能な充分なデータですが、今後、研究をすすめる、得られたデータの質と量をみてから、分析方法を決定したいと思います。

更に、分析テーマの設定やデータの範囲に限定を設定した理由を、山崎先生から「なぜ」と繰り返し問い直され、自分自身の検討や論考の浅さを自覚しました。分析を開始したばかりの時点で発表に応募したことが無謀であったと、少々悔やみもしました。

フロアから質問をいただき、「ビハラー」が殆ど認知されていないこと、抽象度の高い概念名や定義では具体的なイメージがわからないこと、なぜ分析する意義があるのか説明しきれていないことなどの課題が明らかになりました。質的研究初学者の自分が一人で分析して煮つまってしまうより、無謀であったかもしれませんが、早い段階で発表し、山崎先生を始めとする先生方やフロアの皆様からコメントをいただいたことは、今後、研究を進めていく上で非常に貴重な経験でした。深謝申し上げます。引き続き分析を進め、論文化したいと考えております。

【SVコメント】

山崎 浩司（信州大学）

中原さんが今回発表されたご研究は、「ビハラーでつくられる死～仏教的ケアと看取りの共同体の形成過程に関する研究」と銘打たれた博士論文研究の一部である。全国に 3 つしかないビハラー(仏教を背景としたターミナルケア施設)のうちの 1 つをフィールドとし、現時点で 6 名の僧侶をインタビューしていて、逐語録の分析を M-GTA により進めている。

当初設定されていた分析テーマは、「「葬式仏教に甘んじて寺社会に留まっておけばよい」とは思わない僧侶は、なぜ、どのようにして臨床現場に参入してきたか。そしてどのような壁にぶつかり、乗り越えて、臨床現場で自分の居場所を持てるようになったのか(なりつつあるのか)。実存的・根源的に答えられるようになるのか。」という長いものだった。

そこで、「～プロセスの研究」と端的(長くても 1 行以内)にすること、ならびに、1 つではなく複数の分析テーマになる可能性も検討することを提案した。そうしたところ、①「僧侶が自分を寺社会の外に出していくプロセスの研究」、②「僧侶が自分を死の臨床現場につなげていくプロセスの研究」、③「僧侶が自分を病院以外の生死の場につなげていくプロセスの研究」という 3 つの分析テーマを、中原さんは考えられた。

分析テーマの適度な大きさというのは、なかなか判断が難しい。いろいろな基準が考えられるが、個人的には、結果としての理論がどの程度簡潔／複雑であるべきか、という点から逆算して考えてみるのも、1 つの方法ではないかと思う。結果としての理論を現場に返して応用してもらおうとするとき、それは研究者ではない(かもしれない)現場の人が応用するために覚えていられる程度

の簡潔さ／複雑さでなければならない。(例えば、30 個の概念と 10 個のカテゴリーから成る理論＝結果を、応用者は覚えていられるだろうか?)

この観点から、中原さんに 3 つになった分析テーマを逆に 2 つないし 1 つにしなければならぬ、あるいは、2 つか 1 つしか選べないとすればどうなるかと問い、再検討していただいた。すると、中原さんは、①と②とでは「僧侶のいる場の環境に違いはあるものの、①における寺社会の中と外とのつなぎ役が看護師である例が複数あり、①と②は分割しないほうが良い」と考えられて、②「僧侶が自分を死の臨床現場につなげていくプロセスの研究」を今回の分析テーマとして(再)設定された。

これが最終的に最良の分析テーマであるという保証はない。しかし、少なくとも、【研究する人間】としての中原さんが、データ／対象現象の特性をしっかりと把握し、それと自分がもともと設定していた分析テーマを照らし合わせ、データ／対象現象の特性に合わせて分析テーマを修正(再設定)した——つまり、grounded on data の原則に沿うべく、自覚的な選択的判断を行なった——ということはいかがい知れる。このスタンスは、M-GTA(を含む多くの質的研究)において極めて重要なことである。

さて、分析ワークシートを使った概念生成についてである。発表において中原さんが提示された「“僧侶である自分”の有意味感不足」という概念は、「寺に生まれ、寺社会の中で生きてきたが、一般社会との関わりが法務だけでは、自分の意味が足りないのではないかという思いを抱くこと」と定義されている。

ここで中原さんに問うてみたいのは、何が彼らに「一般社会との関わりが法務だけでは、自分の意味が足りないのではないかという思い」を抱かせるのだろうか? 言いかえれば、法務だけで自分の僧侶としての存在意義を見出せる人と、法務だけでは自分の僧侶としての存在意義を見出しきれない人とを分かちつのは、いったい何なのだろうか? である。

恐らく、この「何」を明確に言語化している(できる)対象者は少ないと思う。しかし、明確かつ直接的に言及されていなくても、それを解釈的に読み取れる語りは恐らくある。M-GTA では、分析焦点者の設定によって、対象者の観点に肉薄する(内部者の視点でデータを解釈する)ことを試みるだけでなく、それを踏まえつつ、対象者であるからこそ当たり前すぎて、あるいは、直観的過ぎて明言されにくい感覚や思考を、研究者(【研究する人間】)という第三者ならではの視点でつかもうとする(外部者の視点でデータを解釈する)ことも、同時に求められる。(『ライブ講義 M-GTA』、158 頁下から 5 行目～159 頁 4 行目を参照。)ぜひ、このことを意識しつつ、中原さんには概念生成を続けて行っていただきたいと思う。

最後に、概念間関係の吟味について。分析テーマ、分析焦点者、データ範囲の方法論的限定によって限定された範囲内で、生成しつつある複数の概念間関係を吟味していく中で、「この概念は欠かせない」というものを特定することが重要である。結果として理論の形で対象現象を描き出すうえで、その理論を構成するパーツとなる一つひとつの概念は、異なる重みをもっていることを思い出す必要がある。もっとも欠かせない重要な概念を中心に、その概念とその他の概念との関係を丹念に吟味していくことで、プロセス性をもつダイナミックな理論が描出しやすくなると思う。研究会

当日のSVでもこのことは言及させていただいたが、ぜひこの点についても中原さんにご検討いただき、ますます説得力のある結果としての理論を生成していただければ幸いです。

【第4報告】

西巻悦子(筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程)

Etsuko NISHIMAKI : University of Tsukuba Graduate School of Library, Information and Media Studies

司書教諭における職務認識形成のプロセス

The formation process of a teacher-librarian's job recognition

1 研究の背景と目的

1.1 研究の背景

近年、新しい時代に対応した学校づくりのために組織マネジメントが提唱され⁷、学校経営計画の導入などにより学校の組織や校務分掌の見直しが求められている⁸、そのような流れの中で学校教育改革を経営から見直して成果をあげている学校がある⁹。このような経営の概念は学校教育の下位概念としての学校図書館経営にも及んでいる¹⁰。学校教育は学校長のリーダーシップのもとに学校経営として遂行される。そこで、学校経営に学校図書館教育を組み込んで教育を行っている学校がみられる¹¹。しかし、学校図書館教育を学校教育に組み込み学校経営に活用するという意識は必ずしも高いとはいえない¹²。一方では、2002年の学習指導要領に総合的な学習の時間が新設され学校図書館の活用に謳われるようになり¹³、2003年4月からは司書教諭が12学級以上

⁷ 中央教育審議会答申「今後の学校の管理・運営の在り方について」2003(平成15)年12月
<http://fish.miracle.ne.jp/adaken/toshin/tosin24.pdf#search=> 中央教育審議会答申「今後の地方教育行政の在り方について」(参照2012.9.28)

⁸ 例えば、東京都教育委員会では、2004年に学校の自律的改革を促進し教育サービスの質を向上するため、マネジメントサイクル(PDCA)の仕組みを用いた学校経営計画を全都立高校(2003年度207校)及び全都立盲・ろう・養護学校(56校)に導入した。

⁹ 学校経営は学校全体のカリキュラム経営にみることができる。例えば、中留武昭『生徒主体の進路学習ドリカムプラン:福岡県立城南高校の試み』学事出版、2002、163p、石坂康倫『日比谷高校は進化する:新たな旅立ちに向けて』学事出版、2011、95p.などがある。

¹⁰ 1998年には「学校図書館司書教諭講習」において、「学校経営と学校図書館」(2単位)科目が新設された。

¹¹ 例えば、山形県鶴岡市立朝陽第一小学校著『図書館をつくる教育を変える:鶴岡市立朝陽第一小学校の図書館活用教育』全国学校図書館協議会、2004、47p.など。

¹² 平久江 祐司「学校図書館及び司書教諭に対する校長の意識の在り方:東京、大阪、京都の高等学校校長の意識調査の分析をもとに」日本図書館情報学会、49(2)、p49-p.64、2003。

¹³ 小学校学習指導要領・中学校学習指導要領 総則 学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実すること。

の大規模校に配置されることとなった¹⁴。ただ、2012 年度「学校図書館の現状に関する調査」の結果では、“百科事典や図鑑などの共通教材の配備状況については、多くの小・中学校で配備されているものの、刊行後 10 年以上経過したものが全体の半数以上を占めている”¹⁵と報告されているように、学校図書館が学校教育に活用されているとはいえない学習環境にあることも否定できない。そこで、司書教諭の配備は進んでいるが、学校図書館経営を掌る司書教諭自身の職務認識はどのようなものであるか、それを解明する必要があるのではないだろうか。学校教育という枠組みの中、司書教諭が職場内の様々な相互作用や関係性によって、学校内でどのように位置づけられ、その職務認識をどのように形成しているのかを解明したい。司書教諭の職務認識の形成過程からは学校図書館経営を考える上で様々な示唆が得られ、司書教諭の研修や養成に貢献するものであると考える。

司書教諭制度に関しては、学校図書館法にまつわる懸案事項として数多くの先行研究があり、司書教諭の役割を論じた議論は多数ある。また、学校経営とのかかわりでは、学校図書館経営の視点で“教育経営の観点から自律的な学校図書館経営の実現に向けて努力していくことが、今後の学校図書館経営の展開には必要”¹⁶だとの指摘があり、教育経営学の視点から活用を論じている議論もある¹⁷。しかし、司書教諭の職務認識とその形成を検証した文献は見当たらない。

1.2 研究の目的

本研究は、司書教諭が職場内の様々な相互作用や関係性によって、どのように職務を認識し、そのことにより具体的な職務としてどのようなことを行ったかを明らかにし、認識の変化が及ぼした影響を検証することである。

2 M-GTA に適した研究であるか

2.1 社会的相互作用にかかわる研究か

学校には学校教育の充実を図るために学校図書館が設置され¹⁸、学校図書館経営を掌る司書教諭が任命されているが、多くの場合は兼任のいわゆる充て職である¹⁹。そのため司書教諭として

¹⁴ 文部科学省、「平成 24 年度学校図書館の現状に関する調査」の結果について平成 25 年 2 月 5 日，“司書教諭を必ず置くこととされている 12 学級以上の学校での発令状況は、小・中学校ではそれぞれ 99.6%、98.4%であり前回とほぼ同値、高等学校では 95.9%であり若干増加している。”

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1330588.htm (参照 2014.10.30)

¹⁵ 前掲 3)

¹⁶ 平久江 祐司「新しい教育環境と学校図書館メディアセンター経営」『学校図書館メディアセンター論の構築に向けて』2005,p.16.

¹⁷ 中島正明「学校図書館の活性化に関する教育経営学的研究—連携に関する学校長の意識を中心にして」教育学研究紀要, 2000, p.283-288.

¹⁸ 学校教育法, 第一章 第一節 第一条“学校には、その学校の目的を実現するために必要な校地、校舎、校具、運動場、図書館又は図書室、保健室その他の設備を設けなければならない”

<http://law.e-gov.go.jp/cgi-bin/idxsearch.cgi> (2014.10.28 参照)

¹⁹ 学校図書館法“司書教諭は、主幹教諭(「養護をつかさどる主幹教諭」および「栄養の指導及び管理をつかさどる主幹教諭」を除く)、指導教諭、または、教諭をもってあてる。この場合において、当該・教諭、当該・主幹教諭(「養護をつかさどる主幹教諭」および「栄養の指導及び管理をつかさどる主幹教諭を除く)、当該・指導教諭は、司書教諭の講習を修了した者でなければならない(学校図書館法第五条(司書教諭)第 2 項)。

の職務を遂行する過程では、司書教諭と学校長・教科の他の教師・他教科の教師および児童生徒との関係によって、学校図書館の業務に携わりかつ専科や担任を担当する司書教諭と、実際の業務は学校司書等に任せ専科や担任に専念する司書教諭まで多様な様態が生じる。本研究では、司書教諭の専門的職務として“教育課程の展開に寄与する”ことを意識的に行っている司書教諭を対象とする。そのような司書教諭が職務認識を形成する過程において、学校長や他の教諭との関係で相互作用が生じていると考えられる。

2.2 研究対象とする現象はプロセス性を持っているか

司書教諭には、児童・生徒の学習と教師による教科指導の相互作用を支援するためにより良い学習環境を提供することが求められている。そのため司書教諭は学校図書館教育において他の教師や児童・生徒を指導する立場にあるが、管理職ではなく教諭であるため、人や組織との相互作用においてどのような働きかけをするかは、個人の力量に負うところが大きい²⁰とされてきた。しかし、実際には個人の力量は司書教諭としての認識の変化と相関があり、職務認識が深化してゆく経緯にはプロセス性があると考えられる。

2.3 理論生成への志向性があるか

データから得られる概念の関連性によって、司書教諭という職務が学校という社会において学校長や他の教職員にその専門的職務を認知されるまでをみることでできると考える。そこで、調査を行い司書教諭の専門職的職務が教育課程を支援し学校経営に貢献すると認められるまでの概念の関連性から、司書教諭の職務認識深化のメカニズムの理論化を目指す。(補足:養護教諭は専門職として認知されている。一方、司書教諭は教科教諭の養成段階で司書教諭資格を持つ場合や講習で資格を得る場合があるが、学校現場で発令されない限り司書教諭ではなく有資格者であるに留まる。)

2.4 具体的状況において応用が可能か(学校経営における組織運営におけるマネジメントへの適用)

応用が可能であると考えられる。その理由の1点目は、司書教諭の職務認識深化のメカニズムを理論化することによって司書教諭の専門性は学校教育の経営にかかわるということが明確になることにある。2点目は、兼務(充て職)であるため具体的な活動に至らなかった司書教諭に活動可能な職務内容を提示できる。結果として、学校経営の組織マネジメントを機能させるための司書教諭の組織での職位を確定する²¹ことができると考える。これは、学校教育での学校図書館利活用を通して教育の質の向上を図るために、司書教諭は学校図書館教育において学校経営上の指導的立場に在る必要を明確にすることである。

<http://law.e-gov.go.jp/cgi-bin/idxsearch.cgi> (2014.10.28 参照) 但し、私立学校等では専任司書教諭がいる場合もある。

²⁰ 全国学校図書館協議会編『学校図書館法の解説』日本図書センター、2002.[日本現代教育基本文献叢書[教育基本法制コンメンタール]; 31]

²¹ 学校図書館法“第五条(司書教諭)2 前項の司書教諭は、主幹教諭(略)、指導教諭又は教諭(以下この項において「主幹教諭等」という。)をもって充てる。以下略 出典は前掲10に同じ。

3. 研究テーマ

3.1 学校図書館担当者(司書教諭)の実践面の問題は何か

学校経営における学校長との相互作用および学校司書等の教職員との相互作用を築くことに未熟な場合、また任命されても学校図書館業務に意義を見出せない場合には、司書教諭の職務に割く時間がないこと等を理由に、名目だけの任命と拝命になる場合がある。

3.2 司書教諭の職務の明確化

司書教諭の職務には、「総務的(管理的)職務」、「整理的(技術的)職務」、「奉仕的職務」、「教育指導的職務」などがある。しかし、これらは必ずしも司書教諭だけの職務とは言い切れない。学校図書館担当者には司書教諭のほかに学校司書や係教諭等があり、中でも学校司書は「制度上の業務の定めなし」²²とされてはいるが、実際は、多くの学校で学校司書は図書館資料の収集・分類・整理や貸出・閲覧・参考業務など、また利用指導・読書指導などの「教育指導的職務」を行ない、学校図書館の運営に携わっている。常時、図書館にいるわけではない司書教諭とは異なり、日常的な活動の大半を担っている。

ただ一方では、読書指導については概ね「取組が進んでいる」²³のに対し、前述した資料の未整備状況は司書教諭の「教育指導的職務」を学校全体のカリキュラムに反映できるような学校図書館環境にあるとはいいい難いことも事実である。このことは、生徒の学習や教育指導に関わる司書教諭の職務遂行上の時間的制約の中で、司書教諭自身が専門的職務をどのように認識し、どの職務を優先し、どのように学校司書と協働してゆかかということではないだろうか。学校図書館の内外にあるいは学校以外にも社会的相互作用を築くプロセスを明らかにすることは、司書教諭の専門職としての職務の枠組みが明確になるということだと考える。

3.3 司書教諭の役割認識深化による専門的職務の特定と普遍化(解明しようとしているプロセスがそれをどう解決できるのか)

専門の教科を持つ司書教諭が他教科の専門分野に個々に係わることには無理がある。そこで、学校長、所属教科や他教科、あるいは学校内の他分掌組織との相互作用を明確にする必要がある。そのことは、司書教諭の職務内容を明確にすることになり、学校図書館の課題と課題解決の方向性を示唆するものとなり得る。具体的な1点目では、司書教諭の専門性を明確にするになる。2点目に学校教育に学校図書館教育を位置づけることへの示唆が得られる。

3.4 教科の専門性との相互作用

司書教諭が兼任での制約の中で、教育職であることに立脚してどのような活動をしてきたかを聞き取る。さらに、心理的重圧を乗り越え司書教諭の職務を自己の使命としてとらえるようになるまで職務認識が変化するプロセスにおいてどのような実践(職務)が重要であると認識されていくかを聞き取る。そこから、司書教諭としての専門性に依拠する職務と本来の教科の専門性との切り分けを

²² 「司書教諭といわゆる『学校司書』に関する制度上の比較」平成 20 年、子どもの読書サポーターズ会議、http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/meeting/08092920/1282768.htm (参照日:2014.10.10)

²³ 文部科学省、平成 24 年度「学校図書館の現状に関する調査」の結果について、平成 25 年 2 月 5 日
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1330588.htm (参照日:2014.10.10)

どのように行なったかが明確になると考える。

4. 分析テーマへの絞込み

司書教諭が学校図書館経営におけるカリキュラム支援にどのように係わることができるか、司書教諭の職務認識形成プロセスを通して一定の示唆を得ることを目的とした。具体的には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用い、職務にたいする認識が変化した契機とその結果どのような活動を行ったかの2点を分析テーマとする。

4.1 認識の変化

司書教諭に任命され、職務を遂行するうちに学校図書館に対する認識がどのように変化したかを明らかにする。

4.2 認識の変化から活動内容の変化へ

司書教諭の職務に対する認識が変化した結果、どのような活動を行ったかを明らかにする。

5. インタビューガイド

5.1 現在の活動は何か(現状を把握するための予備調査)

- ①教科と授業時間数を教えてください(or 現職の時の教科と授業時間数)。
- ②司書教諭として仕事をするのは週当たり何時間くらいですか(or 現職当時の仕事の時間数)。
- ③分掌と職務分担および役職名はなんですか(or 現職当時の分掌等)。
- ④司書教諭としての主な仕事は何ですか(なんだとお考えでしたか)。

5.2 司書教諭の職務認識(相互作用からの認識の変化を聞く)

- ①職務を遂行するうちに学校図書館に対する認識がどのように変化しましたか。
- ②変化するきっかけは何でしたか。
- ③その結果、どのような活動をなさいましたか。

6. データの収集法と範囲

6.1 インタビュー

分析焦点者に対して半構造化インタビューを行う。調査者がインタビューガイドを用い分析焦点者から得られるデータを分析する。なお、本研究の分析焦点者に尋ねる共通した質問項目では、学校図書館に対する認識の変化のプロセスと、認識の変化に影響を及ぼす要因を明らかにするため、「現在の活動」、「司書教諭をどのような職務として認識するようになったか」、「認識変化後の活動の具体例」を尋ねる。

6.2 フィールドワーク

筆者が2008年4月から2010年3月にかけてA高等学校の主幹教諭兼司書教諭として勤務していた時の資料、2013年9月から2014年4月まで産休代替学校司書として勤務した時の資料を参考にする。

7. 分析焦点者の設定

7.1 対象

分析焦点者とは、研究上対象として設定される人間を指すため、基本的に研究テーマと分析テーマから規定される。本研究では具体的にインタビュー対象者を、公立の小学校・中学校・高等学校における司書教諭経験者および現在司書教諭の任にある教師とする(特別支援学校および私立学校は除く)。学級担任が複数教科を受け持つ小学校と、教科担任制である中学校・高等学校では、司書教諭の活動や司書教諭への職務認識が異なる場合が想定されるが、相互作用から職務認識を形成するまでの差異には多様性をも含めた示唆が得られると考え、あえて分けないこととする。但し、インタビューの属性には明記するものとする。

7.2 対象者の選定

学校図書館関連団体(例: 社団法人全国学校図書館協議会)等が刊行する機関誌に司書教諭としての学校図書館利活用記事が掲載されている執筆者、および、学校図書館関連研究会で知己となった現在、司書教諭として活動中の教諭から選定する。各校種2名に依頼し、インタビューによって他の司書教諭を推薦していただくスノーボール方式とする。

【会場からのコメント概要】

3人の方からコメントをいただきました。学校図書館は学習環境としてあるもので、学校経営に口出しすることはないのではないかというご指摘でした。大学ではあるいはあり得るかもしれないが大抵は資料や情報を提供してくれる場として活用なさっているというご意見でした。また、カリキュラムの定義に関してのご質問がありました。定まった定義が確立しているわけではないので、一般的な定義では狭義と広義があり、本研究での学校教育の総体としての教科編成や時間割等を含む協議の教育課程としてしていると申しました。また、ご経験から校長がカリキュラムに関連して司書教諭を学校経営に参画させることはないとのことがありました。SVの竹下先生から補足のご説明をいただきました。従来の学校教育では経営の視点で教育活動が論じられることが少なく、最近の動向として教育の質を高め成果をあげるためにマネジメントの考えが取り入れられるようになったこと、学校図書館もマネジメントサイクルの一構成要素として意識されるようになり、そのための人として司書教諭の役割を検証しようとしている研究であると図解してくださいました。お手数をおかけしてしまいました。

【感想】

SVの竹下先生、当日フロアの先生方から貴重なご意見をいただき感謝申し上げます。構想発表の段階でも真摯に対応していただいたことは大変な収穫でございました。すべてを改善できたということではできませんが、結論が前面に見えてしまうような無謀な書き方でしたので、大幅に修正を加えました。どうして司書教諭が学校という組織において機能しないのかを出発点として、学校図書館教育を実践している司書教諭の認識にはどのような特徴があるのか、そこに至るプロセスにおいて転機となったことは何か、その際に具体的にどのような活動をしたのかを聞きたいと思っています。

す。テーマが煮詰まっていなかったことを反省しています。MGTA を学ぶことによって今後の研究の方向性が明確になり、今回の発表後の懇親会では、諸先生方から丁寧に語説明をいただくことができ、計画を練り直すことができました。今後はインタビューを行い中間発表できるように頑張りたいと思います。発表の機会を頂戴したことを深く感謝申し上げます。

【SV コメント】

竹下 浩（職業能力開発総合大学校）

興味深いテーマで勉強になりました。ご研究の一層のご発展をお祈り申し上げます。

1. 発表までのやり取り概要

メールでやり取り(受信 33 件、送信 11 件)し、対面セッションも実施しました。10 月 9 日に最初のご挨拶を頂き、11 日に事務局提出版「エントリー構想」を頂きました。拝読し、以下 2 点について確認していききました。

(1) インタビューについて質問しました

インタビューデータもお送り頂くよう依頼、同日送付頂きました。A4 版 3 頁(1365 字)で、職歴が箇条書されていました。そこで、話者の感情や思いが現れるように逐語化する必要があり、「ライブ講義」p.239 を読むとイメージが把握できること等ご説明しました。また、メールが戻ってきてしまうとの相談を受けましたので、プロバイダに確認する方法をアドバイスさせて頂きました。

13 日、インタビューの質問項目案を頂きました。逐語化だけで再インタビューは要求していませんでしたので、録音の有無を確認しました。録音なしでしたので、質的研究についての理解が先となりました。

14 日、「研究目的と M-GTA が適合しているか、分析テーマが妥当かどうか」確認してからインタビューの質問項目が決まること、半構造化インタビューは質的手法を完全に理解していないと気軽にはできず、私自身の失敗の反省から拙速でインタビューすると先方にご迷惑をかけ協力先を失うこともあることなど、ご説明しました。

(2) チェック項目を確認したいと思いました

まだ全体のイメージがつかめませんでした。文中に「1. 問題関心、2. 研究する人間、3. M-GTA に適した研究であるか、については分析と検討を行った」とあったので、全項目について検討した内容を送付頂くようお願いしました。12 日、参考文献 2 件の送付をお願いし、同日頂きました。海外も含めた先行研究のレビュー状況についてもお伺いしました。

15 日、「発表要項」(事務局から送付済)を念のためお送りし、「M-GTA の必然性・研究テーマ・分析テーマ・質問項目」の流れを確認したい旨再度ご説明しました。適合するかどうか判らなくなったとのことでしたので、これから一緒に確認することにしました。まずは「4. 発表項目」を現時点版でお送り頂くよう再度お願いしました。その際「実践面の問題は何か」「解明しようとしているプロセ

スがそれをどう解決できるのか」判るようにお願いしました。19,25、26 日に構想発表案を頂き、27 日に対面を実施しました。

2. 当日

構想発表なので 30 分しかなく、なるべく西巻さんとフロアとのやり取りを増やすよう心がけました。

まずは自己紹介もかねて「1. 背景」をお願いしました。用語など他の領域の会員に判り難いかなと思いましたので、フロアに素朴な疑問をお願いしました。詳しいやり取りは西巻さんが書かれていることと存じますので、以下 2 点だけご報告します。

途中、何がしたいのかについて、西巻さんに代わり私からフロアにお答えしたのは、「生徒の学力低下に伴い図書館が活用されなくなっている。これを解決するには、例えば図書館情報学等の既存理論や概念では説明できない。だから司書教諭が周囲を巻き込んでいくプロセスを予測・説明する理論を構築する必要があり、そうすることで司書教諭という仕事の意義や可能性が見えてくる」と仰りたいのでは、ということでした。

最後に、「先決め(思い込み)」していないか、お伺いしました。どうも「原因→職務認識→経営参画」というモデルが既にあるようです。司書が職務を認識すれば学校経営に参画できる(万事うまくいく)、だから M-GTA で職務認識の先行要因を探るという感じです。

(1)「職務認識→経営参画の因果関係を、当然視していないか？」

司書がカリキュラムを作成したら、すべてうまくいくのでしょうか。「既存概念を自分が正しいと思っている因果関係で説明している」と査読で指摘される懸念があります。

(2)「経営参画要因は、司書の職務認識の1つだけか？」

例えば「声掛けで頼られるようになる」「学生が立ち寄りすることで見方や使い方が変わる」「他学科への関心や道具的支援が他教員のレディネスや共感を促進する」などが、データから浮上する可能性はないでしょうか。

お目通し、有難うございました。少しでも、当日会場に来られなかった会員の皆様のご研究のご参考になれば幸いです。それでは、どうぞよろしくお願い申し上げます。

◇近 況 報 告

(1) 氏名、(2) 所属、(3) 領域、(4) キーワード

(1) 伊藤由美子

(2) 南山大学大学院 人間文化研究科教育ファシリテーション専攻

(3) その他

(4) 大卒難聴者、社会への移行期、難聴対峙、職場適応

私は聴覚障害教育を長年担当し、難聴者が難聴固有のきき取り難さや、きき取り難さを健聴者に理解されないことから疎外感、孤独感を抱いていることを目の当たりにしました。そこで、昨年 4 月から難聴者と健聴者の関係性を研究テーマに修士論文に着手しました。難聴受容できない難聴者もみられ、研究協力者を依頼することに難航しましたが、最終的に 10 人の方をお願いすることができました。ヴァリエーション豊かな 1 名から分析を始めましたが、概念生成の段階で、なかなか概念を決定できずに頓挫していました。幸いにも今年 3 月の研究定例会に中間発表の機会を得て、SV を受けながら結果図・ストーリーラインまで、曲がりなりにも考えをすすめることができました。発表の場で、坂本先生をはじめ、小倉先生、フロアーの方のアドバイスやご意見をいただいたことは、その後の研究を進める上で、大いなるモチベーションとなりました。

熊本の合同研究会では、分析テーマや分析焦点者の設定、概念生成上での社会的相互作用について、じっくり時間をかけ、グループで検討し合うことで、その重要性を肌で感じとることができました。日頃は木下先生の文献を頼りに、研究を進めていますが、定例研究会や合同研究会では、SV の先生方や M-GTA を研究方法に取り入れている方々から直接考えを拝聴することができ、" 考えたつもり"意識になっている自分への戒めになりました。

修士論文提出期限まで 2 か月を切りました。個人で考えていると、" 再検討したつもり"意識に陥り、論文をまとめ上げることに終始し、分析、解釈が甘くなっていることは否めません。研究協力者の方の貴重なデータを無駄にしないためにも、研究結果としての結果図が分析テーマの視点を表しているのか、自分や他者との社会的相互作用が結果図に表れているのかなど、再検討して論文を執筆していきます。

M-GTA を研究方法に選択した昨年 4 月より、私は本研究会に入会しました。研究会やニューズレターを通して、刺激も受けましたし、多くの学びを得ました。

今後とも、よろしくお願いします。

.....

(1) 江尻晴美

(2) 中部大学生命健康科学部

(3) 保健看護学科

(4) 看護学

私は、保健看護学科の教員をしながら、現在大学院の博士課程に在籍しており、M-GTA を使用した研究を計画中です。M-GTA 入会したのは、半年ほど前ですが、前回の定例研究会と熊本で行われた合同研究会に参加させていただきました。もとより質的研究に関心がありいくつか図書

を手にしたものの、博士課程の研究となると研究手法も問われてきます。そのため、指導教員の後押しもあり会員となった次第です。定例研究会では、実際に行われている研究を通してスーパーバイズを聞くことができるので、実践に即した助言をお伺いすることができます。また、8月の合同研究会ではワークショップが行われ、スーパーバイザーの先生方から助言を受けながら実際にM-GTAで分析していくことができました。本を読んで“知っていること”と“実際に分析すること”には、大きな違いがあり、体験を通して学習を深めることができました。

このたび、11月8日に立教大学において行われた第69回定例研究会に参加させていただきました。今回も発表者の発表及びスーパーバイズを聞いて、改めて勉強になりました。とくに印象に残ったことは、“研究手法ありき”ではないことです。やはり、研究は目的からその分析方法が選択されることが前提です。そして、使用される研究手法について、その哲学的な発生や理論的枠組みを理解して研究に取りかかる必要があるのではないかと思います。私は博士課程の学生でもあるので、こうした理論的枠組みも言及することが必要となるのですが、M-GTAを使用して分析する以上は、その手法だけではなく理論的背景までも理解していると自信を持って言えるようにしたいと思っています。定例研究会で、スーパーバイザーからの助言で出てきたキーワードとその説明を聞くと「ああ、そうだったな」とか「そのように解釈するのだな」と記憶を呼び戻したり、自分の認識を確認することができます。そして、自分の研究テーマだったら？と考えを発展させることが可能で、今の私にとってはとても有用な勉強の機会です。

また、研究会は仲間づくりの場でもあります。今回は都合で出席ができませんでしたが、懇親会もあるので普段の仕事や学生生活の仲間に加えて、仲間づくりができます。実際にM-GTAで分析したことのある人、分析中の人、取り掛かろうとしている人といろいろですが、失敗談やコツなども気軽に聞くことができます。今回の研究会でも、仲間との再会ができました。私の場合、仲間同士で励まし合い、情報交換ができることは、自分のモチベーションを保つことにつながっております。さらに、スーパーバイザーの先生方との距離がとても近いこともありがたいことです。雲の上の人のような存在ではなく、まさに勉強中の者にサポートをしてくださる先生方なのではないかと確信をしております。

先日の連絡事項の中で、今後は構想発表のみになることが発表されました。私の研究が進んだら、ぜひこの場で発表をさせていただき、アドバイスをいただこうと考えていた矢先でしたので、私にとっては大変残念な発表でした。ただ、先生方のお立場を考えると、すでに進んでしまっている研究を大幅に軌道修正する場合などは大変困難でもあり、このようになったのかなあと勝手に解釈をしております。参加記として、自分の考えや思いを述べてまいりましたが、研究会に毎回参加するごとに新たな発見や深まることがあります。M-GTAのエキスパートを目指して、今後も努力してまいりたいと思います。

.....
(1) 竹下 浩

- (2) 職業能力開発総合大学校
- (3) 経営管理・社会心理
- (4) チーム学習・管理スキル・対人スキル

10 月から仕事が変わりましたので、じゃあ近況報告をということになりました。締め切りをだいぶ過ぎ、事務局の方に申し訳ありませんという気持ちで書いております。話がわき道にそれますが、以前自分も NL の編集をしたことがあり、研究会に入りたいと言って入ったのに近況報告は書けませんという方が多く閉口したことを思い出しました。

職業能力開発とは、働きたい人や、会社にいる人、これから社会に出る人が、仕事の場ですぐに活躍できるように、スキルを身に付けるお手伝いをする事です。これまで、企業の海外進出コンサルティングや、学生や社会人の学習支援の事業開発をしてきましたので、その延長線上ですね。研究から言いますと、ずっと社会や会社での学びと成長について手探りしているので、今後も現場での問題解決に役立つ研究をしていきたいと思っています。

研究会では、組織のマネジメントに関わるテーマや、専門職としての学びや成長、およびその支援に関連するテーマの SV をお申し付かることが多く、勉強させて頂いております。自分でも、M-GTA をちゃんと使った論文をアウトプットしていきたいと思います。世話人会の担当委員会のお仕事も、ご迷惑をかけないように頑張ります。それでは、これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

.....

- (1) 山田牧子
- (2) 日本保健医療大学／聖学院大学大学院人間福祉学研究科スピリチュアル分野修士課程
- (3) 老年看護領域
- (4) 被災高齢者、クライシス、スピリチュアルケア

自己紹介

3 年前より臨床看護師から後進に何か貢献できればと看護教員の道に進みました。

臨床では癌患者の看護や終末期看護などを大学病院や在宅看護などを通し経験する中で人間の深いスピリチュアルな次元までの理解が看護にとって大切な要素ではないかと考えるようになりました。私は東北地方の出身なので 2011 年に起きた東日本大震災は私が育った故郷に大きなダメージを与え、小さいころに遊んだ風景などが失われてしまい、東北の人々の苦悩には心が痛みます。東日本で震災にあった人々はなんとか立ち上がろうと進んでいます。そこでは様々な支援が行われていますが、スピリチュアルな支援も実践家によって行われています。その中に私も微力ながら何かをお手伝いさせていただければと思い少しずつ関わりを始めています。そして私たち看護者がどのようにスピリチュアルケアを考えていけばよいのか、それを研究していこうというのが大

学院に進んだ動機です。

M-GTA の出会いはちょうど一つの論文を仕上げた時に私の上司から、「あなたの研究ならよりもっとインタビューデータに沿ったまとめ方ができる方法がある」と M-GTA という研究方法があることを紹介していただいたことです。先に会員だった上司の先生についていき前回の研究会に参加したことが始まりです。ちょうど入学した大学院でも小倉先生の授業で学ばせていただく機会にも恵まれ、この研究方法の素晴らしさ面白さを学びつつあるところです。

今回の研究会で皆様の貴重な研究に触れ、またそれを M-GTA で研究していく意義も改めて見ることができ、とても刺激を受けました。これから研究を進める中でデータと対話しながらよい研究を進めていけるようにまた、これからも研究会にも参加させていただきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

.....

◇M-GTA 研究会 第 70 回定例研究会のお知らせ

日時:2015 年 1 月 24 日(土)13:00～18:00

会場:未定

◇編集後記

今年も残りあとわずかとなりました。先日流行語大賞が発表され、「ダメよ。ダメダメ」が対象を取りました。いつもわりと気軽に何気なく使っている「ダメよ」が、言い方一つで人々の心に残り、広がっていく。そんな思いでこの流行語大賞を見ていました。

地震や御嶽山の噴火、土砂災害などで多くの被害があった年でした。謝罪会見もいろいろな形でたくさんありました。来年は、これら負のイメージのない年でありますようお願いばかりです。(塚原記)